

婦系圖 (前編)

泉鏡花作

目次

鯛、比目魚

見知越

矢車草

新學士

縁談

一家一門

道學先生

男金女士

電車

柏家

誰が引く袖

紫

はなむけ
巢立の鷹

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

鯛、比目魚

—

素顔に口紅で美しいから、其の色に紛ふけれども、可愛い音は、唇が鳴るのではない。お鳶は、皓齒に酸漿を含むで居る。・・・

早瀬の細君は丁ど（二十）と見えるが三だとサ、其年紀で酸漿を鳴らすんだもの、大概素性も知れたもんだ、と四邊近所は官員の多い、屋敷町の夫人連が風説をする。

既に昨夜も、神樂坂の縁日に、桜草を買った次手に、可いのを撰つて、晝夜帯の間に挟むで歸つた酸漿を、隣家の娘——女學生に、一ツ上げませう、と言つて、そんな野蛮なものは要らないわ！と勿ねられて、利いた風な、と口惜がった。

面當てと云ふでもあるまい。恰も其の隣家の娘の居間と、垣一ツ隔てた此の臺所、腰障子の際に、懐手で佇んで、何だか所在なさうに、頻に酸漿を鳴らして居たが、不圖銀杏返しほつれた鬢を傾けて、目をぱつちりと開けて何かを聞澄ますやうにした。

コロ／＼コロ／＼、クウ／＼コロ／＼と聲がする。
唇の鳴るのに連れて。

一寸吹留むと、今は寂寞として、其聲が止まつて、
ぼつと腰障子へ暖う春の日は當るが、軒を傳ふ猫も
居らず、雀の影もさゝぬ。

鼠かと思つた然うで、斜に棚の上を見遣つたが、
鍋も重箱もかたりとも云はず、古新聞が又がさりとも
せぬ。

四邊を見ながら、うつかり酸漿に齒が觸る。と其
の幽な音にも直ちに應じて、コロ／＼。少し心着いて、
續けざまに吹いて見れば、透かさずクウ／＼、
調子を合はせる。

聞き定めて、

「おや、」と云つて、一段下流の板敷へ下りると、
お源と云ふ女中が、今しがた此處から駈け出して、
玄關の來客を取次いだ草履が一ツ。そんないに黒い
裏を見せて引くり返つて居るのを、白い指で一寸直
し、素足に引懸け、がたり腰障子を左へ開けると、
十時過ぎの太陽が、向ふの井戸端の、柳の上から斜
つかけに、遍く射込んで、俎の上に揃へた、蒨草

の根を、紅に照らしたばかり。

多分は其だらう、口眞似をするのは、と當りをつけた御用聞きごようきの酒屋さかやの小僧こぞうは、何處どこにも隠れて居るのではなかつた。

眉まゆを顰ひそめながら、其癖そのくせ恍惚うつとりした、迫せまらない顔色かほつきで、今度は口くちずさむと言いふよりも故わざと試こころみにクゝと舌したの尖さきで音ねを入れる。響ひびきに應おつじて、コロ／＼と行やつたが、此方こつちは一吹ひとふきで控ひかへたのに、先方さきは發は奮ずんだと見え、コロ／＼コロ。

これを聞きいて、屈かゞむで、板いたへ敷しく半纏はんてんの裙すそを搔かいと、膝ひざに挟はさんだ下交したがひの袂つまを内端うちはに、障子腰しやうじこしから肩かたを乗出のりだすやうにして、つい目の前まへの、下水げすみの溜たまりに目を着つけた。

もとより、溝板どぶいたの蓋ふたがあるから、ものゝ形かたちは見えぬけれども、優やさしい連弾つれびきは正まさしく其の中なか。

笑ゑみを含ふくむで、クウ／＼と吹ふき鳴ならすと、コロ／＼と拍子ひやうしを揃そろへて、近ちかづいたゞけ音ねを高たかく、調子てうしが冴さえてカタ／＼カタ！

「蛙かへるだね。」

と莞爾にっこりした、其その唇くちびるの紅べにを染そめたやうに、酸漿ほくづきを指ゆびに取とつて、衣紋えもんを輕かるく拊うちながら、

「憎にくらしい、お源げんや・・・」
來きて御覽ごらん、と呼よばうとして、聲こゑが出でたのを、壓おさへて酸漿ほくづきを又また吸すつた。

ククと吹ふく、カタノ、ククと吹ふく、カタノ、蝶々てふくの羽はねで三味線みせんの胴どうをうつかと思おもはれつゝ、静しづかに長たくる春はるの日ひや、お蔦つたの袖そでに二三さん寸すん。

「おう、」と突つ込んで長ながく引ひいた、遠とほくから威勢いせいの可いい聲こゑ。

來きたのは江戸前えどまへの魚屋さかなやで。

此處へ、臺所と居間の隔てを開け、茶菓子を運んで、二階から下りたお源といふ、小柄の可い島田の女中が、逆上せたやうな顔色で、

「奥様、魚屋が参りました。」

「大きな聲をおしでないよ。」

とお鳶は振向いて低聲で嗜め、お源が背後から通るやうに、身を開きながら、

「聞こえるぢやないか。」

目配せをすると、お源は莞爾して俯向いたが、ほんのり紅くした顔を勝手口から外へ出して路地の中を目迎へる。

「奥様は？」

と其の顔へ、打着けるやうに聲を懸けた。又是が其の（おう。）の調子で響いたので、お源が氣を揉むで、手を振つて壓へた處へ、盤臺を肩にぬいと立つた魚屋は、渾名を（め組）と稱へる、名代の芝ツ兒。

半纏は薄汚れ、腹掛の色が褪せ、三尺が捻ぢくれ

て、股引は縮むだ、が、盤臺は美しい。

いつもの向顛巻が、四五日陽氣がほか／＼するの
で、ひしやげ帽子を蓮の葉かぶり、些とも涼しさう
には見えぬ。例によつて飲こしめした、朝から赤ら
顔の、とろんとした目で、お蔦が其處に居るのを見
て、

「おいでなさい、奥様、へへへへへ。」

「お止しつてば、氣障ぢやないか。お源もまた、」

と指の尖で、鬢を一寸搔きながら、袖を女中の肩
に當てゝ、

「お前も矢張言ふんだもの、半纏着た奥様が、江
戸に在るものかね。」

「だつて、ねえ、めのさん。」

とお源は袖を擦抜けて、俎板の前へ蹲む。

「其ぢや御新造かね。」

「そんなお錢はありやしないわ。」

「ぢや、おかみさん。」

「あいよ。」

「へッ、」

と一ツ胸でしゃくつて笑ひながら、盤臺を下ろし

て、天秤を立掛ける時、菠稜草を揃へて居る、お源の背を上から見て、

「相かはらず大な尻だぜ、臺所充滿だ。串戯ぢやねえ。目量にしたら、凡そ何のくれえ掛るだらう。」

「お前さんの壓ぐらゐ掛ります。」

「あゝ云ふ口だ。はゝはゝ、奥さんのお仕込みだらう。」

「めの字、」

「えゝ、」

「二階にお客さまが居るぢやないか、奥様はおよしと言ふのにね。」

「おつと、然うか、」

「ぺろ／＼と舌を吸つて、」

「何だつて、日蔭ものにして置くだらう、こんな實のある、氣前の可い……」

「値切らない、」

「眞個によ、所帯持の可い姉さんを。分らない旦那ぢやねえか。」

「可いよ。私が承知して居るんだから、」

と眦の切れたのを伏目に成つて、お鳶は襟に頤をつけたが、愼ましく、しをらしく、且つ濕やかに見

えたので、め組もおとなしく頷いた。

お源が横向きに口を出して、

「何があるの。」

「へ、野暮な事を聞くもんだ。相變らず旨えものを食して遣るのよ。黙つて入物を出しねえな。」

「はい、はい、どうせ無代價で頂戴いたしますものでございます。めのさんのお魚は、現金にも月末にも、ついぞ、お代をお取り遊ばしたことはございません。」

「皮肉を言ふぜ。何てつたつて、お前はどうぞ無代價で頂くもんぢやねえか。」

「大きに、お世話、御主人様から頂きます。」

「あれ、見や、島田を揺つてら。」

「一寸、番毎いがみあつて居ないでさ。お源や、お客様に御飯が出さうかい。」

「如何でございますか、婦人の方ですから、そんなに、お手間は取れますまい。」

「だつてお前、急に歸りさうもないぢやないか。」
 と云つて、め組の蓋を拂つた盤臺を差覗くと、鯛
 の濡色輝いて、廣重の繪を見る風情、柳の影は映ら
 ぬが、河岸の朝の月影は、未だ其の鱗に消えないの
 である。

俎板をポンと渡すと、目の下一尺の鮮紅、反を打
 つて翻然と乗る。

とろんこの目には似ず、キラリと出刃を眞名箸の
 構に取つて、

「刺身かい。」

「然うね、」

とお蔦は、半纏の袖を合はせて、一寸傾く。

「焼きねえ、昨日も刺身だつたから……」

と腰を入れると腕の冴、颯と吹いて、鱗がばら／

。

「次手に少々お焼きなさいますなぞも又、

へへへへ、お宜しうございませう。御婦人のお客
 で、お二階ぢや大層お話が持てます一さうでござい

ますから。」

「憚様。お客は旦那様のお友達の母様でございます

す。」

めの字が鯛をおろす形は、何時見ても染々可い、と評判の手つきに見惚れながら、お源が引取つて口を入れる。

えらを一突き、ぐいと放して、

「凹んだな。何時かの新ぎれぢやねえけれど、めの公鹽が廻り過ぎたい。」

「然ういや、めの字、」

とお薦は片手を懐に、するりと迂る黒縹子の襟を引いて、

「過日頼んだ、河野さん許へ、其の後廻つてくれないツて言ふぢやないか、何うしたの？」

「むゝ、河野ツて。何かい、あの南町のお邸かい。」

「あゝ、何故か、魚屋が来ないツて、昨日も内へ来て、旦那に然う言つて居なすつたよ。行かない

の、」

「行かねえ。」

「眞個に、」

「行きませんとも！」

「なぜさ、」

「何故ツて、お前、あん獣ア、」

お源が慌しく、

「めのさん、」

「何だ。」

「めのさんや。お前さん一寸、お二階に来ていら

つしやるのは其の河野さんの母様ぢやないか、氣を

お着けな。」

帽子をすつぱり亀の子竦みで、

「ホイ阿陀佛、へい、彼處にや隠居ばかりだと思

つたら・・・。」

「否ね、つい一昨日あたり故郷の静岡からおいで

なすつたんですとさ。私がお取次に出たら河野の母

でございます、とおつしやつたわ。」

「だから、母様が見えたのに、おいしいものが無

いッて、河野さんが言つて居なすつたのさ、お前、」

「おいしいものが聞いて呆れら。へい、而して静

岡だつてね。」

「あゝ、」

「と御維新以來のかた、江戸兒の親分の、慶喜様が行つて居た處だ。第一慥く申すめの公も、江戸城を明渡しの、落人を極めた時分、二年越居た事がありますぜ。」

馬鹿にしねえ、大親分が居て、其から私が居た土地だ。大概江戸ツ兒になつてさうなもんだに、又何うして、あんな獣が居るんだらう。

聞きねえ。

過日もね、お前、眞個はお前、一軒かけ離れて、彼處へ行くのは荷なんだけれども、些とポカと來たし、佳い魚がなくツて困るツて言ひなさる、廻つてお上げ、とお前さんが口を利くから、チヨツ蔦ちやんの言ふこツた。

脛を達引け、と二三度行つたわ。何ぢやねえか、一度お前、おう、先公、居るかいツて、景氣に呼んだと思ひねえ。」

お蔦は莞爾して、

「せんこうツて誰のこつたね。」

「内の、お友達よ。河野さんは、學士だとか、學者だとか、先生だとか言ふこツたから、一ツ奉つて呼んだのよ。」

と鱚^{ひれ}をばつさり。

四

「可いぢやねえか、お前、先公だから先公よ。何
も野郎とも兄弟とも言つたわけぢやねえ。」

と庖丁の尖を危く迂らして、鼻の下を引擦つて、

「すると何だ。肥満のお三どんが、ぶつちやう面

をしやあがつて、旦那様とか、先生とかお言ひなさ

い、御近所へ聞えます、と吐したゞろうぢやねえか。

え、そんなに奉られたけりや三太夫でも抱へれ

ば可い。口に税を出すくらゐなら、憚ながら私あ

酒も啖はなけりや魚も賣らねえ。お源ちゃんの前だ

けれども。おつと恚うした處は、お尻の方だ。」

「そんなに、お邪魔なら退けますよ。」

お源が俎板を直して向直る。と面を合はせて、

「は、は、は、は、今日あ、」

「何かい、其で腹を立てて行かないのかい。」

「其處はお前さんに免じて肝の蟲を壓へつけた。

翌日も廻つたがね、今度は言種が尚ほ氣に食はねえ。

今日は最もお菜が出来たから要らないよサ。合點

なるめえぢやねえか。私が商ふ魚だつて、品に因つ

ちや好嫌えは當然だ。ものを見てよ、其上で欲しく

なきや止すが可い。喰いたくもねえものを勿體ねえ、お附合ひに買ふにや當りやせん、食もたれの噫なんぞで、せゝり箸をされた日にや、第一魚が可哀相だ。

此方はお前、河岸で一番首を討取る氣組みで、佳いものを仕入れてよ、一ツおいしく食はせて遣らうと、汗みづくで駈附けるんだ。醜女が情人を探しはしめえし、最う出来たよで斷られちや、間尺に合ふもんぢやねえ。ね、薫ちゃんの前だけれど、

「今度は私が背後を向こうか。」

とお蔦は、下に居る女中の上から、向ふの棚へ手を伸ばして、摺鉢に伏せた目筈を取る。

「そらよ、此方が旦の分。こりやお源坊のだ。奥様はあらが可い、煮るとも潮にするともして、天窓を嚙りの、目球をつるりだ。」

「私は天窓を嚙るのかい。」

お蔦は莞爾して、め組に其の筈を持たせながら、指の尖で、涼しい鯛の目を一寸當る。

「ワンノ、に言ふやうだわ、何だねえ、失禮な。」

とお源は柄杓で、がたりと手桶の底を汲む。

「田舎ものめ、河野の邸へ鞍替しろ、朝飯に牛はあつても、鯛の目を食つた犬は昔から江戸にや無えんだ。」

「はい、はい、」

手桶を引立て、お源は腰を切つて、出て、溝板を下駄で鳴らす。

「あれ、邪険にお踏みでない。私の情人が居るんだから。」

「情人がね。」

「へい、」

と言つたばかり、此方は忙がしい顔色で、女中は聞棄てにして、井戸端へかた／＼行く。

「溝の中に、はてな。」

印半纏の腰を落して、溝板を見當に指しながら、ひしやげた帽子をくるりと廻はして、

「変變つてますね。」

「見せやうか。」

「是非お目に懸りてえね。」

「お待ちよ、」

と目筈は流へ。お蔦は立直つて腰障子へ手をかけ

たが、溝の上に背伸をして、今度は氣構へて勿體らしく酸漿をクウと鳴らすと、言合せたやうにコロ／＼コロ。

「ね、可愛いだらう。」

カタ／＼カタ！

「蛙だ、蛙だ。はゝはゝ、こ此奴ア可い。なるほど蔦ちやんの情人かも知れねえ。」

「朧月夜の色なんだよ。」

得意らしく濟ました顔は、柳に對して花やかである。

「畜生め、拜んで遣れ。」

と好事に蹲込んで、溝板を取ろうとする、め組は手品の玉手箱の蓋を開ける手つきなり。

「お止しよ、遁げるから、」

と言ふ處へ、しとやかに、階子段を下りる音。トタンに井戸端で、ざあと鳴つたは、柳の枝に風ならず、長閑に釣瓶を覆したのである。

續いてドンノ、粗略に下りたのは、名を主税といふ、當家、早瀬の主人で、直ぐに玄關に聲が聞える。「失禮、河野さんに……又……お遊

びに。然やうなら。……」

格子戸の音がしたのは、客が外へ出たのである。

其の時、お蔦の留めるのも聞かないで、溝なる連弾を見届けやうと、矢庭に其蓋を拂つため組は、蛙の形も認めない先に、お蔦がすつと身を退いて、腰障子の蔭へ立隠れをしたので、あゝ、落人でもないに氣の毒だ、と思つて、客は那樣人間だらうと、格子から今出た處を透かして見る。と其處で一つ腰を屈めて、立直つた束髪は、前刻から風説のあつた、河野の母親と云ふ女性。

黒の紋羽二重の紋着羽織、些と丈の長いのを襟を詰めた後姿。忤が學士だ先生だと言ふのでも、大略知れた年紀は争はれず、髪は薄い、櫛にてら／＼

と艶が見えた。

背は高いが、小肥に肥った肩の稍怒つたのは、妙齡には御難だけれども、此の位な年配で、服装が可いと威が備はる。それに焦茶の肩掛をしたのは、今日あたりの陽氣には聊かお荷物だらうと思はれるが、是も近頃は身躰の一ツで、貴婦人方は、菖蒲が過ぎても遊ばさるゝ。

直ぐに御歩行かと思ふと、未だ其から兩手へ手袋を嵌めたが、念入りに片手づゝ手首へぐつと扱いた時、襦袢の裏の紅いのがチラリと翻る。

年紀のほどを心づもり知つたため組は、其のちら／＼を一目見ると、や、火の粉が飛んだやうに、へツと頸を窘めた處へ、

「まだ、花道かい？」

とお蔦が低聲。

「附際々々、」

と最う一息め組の首を縮める時、先方は格子戸に立かけた蝙蝠傘を手に取つて、又候會釋がある。

「思入れ澤山だ。いよう！」

おつと其の口を塞いだ。聲は固より聞えまいが、此方に人の居るは知れたらう。

振り返つて、額の廣い、鼻筋の通つた顔で、屹と見越した、目が光つて、其のまゝ悠々と路地を町へ。――勿論勝手口は通らぬのである。め組はつか／＼と二足三足、

「おや／＼おや、」

調子はずれな聲を放つて、手を擴げて茫乎となる。

「何うどうしたの。」

「可訝しいぜ。」

と急に威勢よく引返して、

「あれが、今のが、其の、河野ツてえのゝ母親か

ね、静岡だつて、故郷あ、」

「あゝ。」

「家は醫師ぢやねえかしらん。はてな。」

「何うした、め組。」

とむぞうさに臺所へ現はれた、二十七八の小薩張したのの主税である。

「へゝゝへゝ、」

満面に笑を含むだ、め組は蓮葉帽子の中から、夕映のやうな顔色。

「お早うござい。」

「何が早いものか。最う午飯だらう、何だ御馳走

は、

と覗込んで、

「はゝあ、鯛だな。」

「鯛とおつしやいよ、見ツともない。」

とお蔭が笑ふ。

「他の魚屋の商ふのは鯛さ、め組のに限つちや鯛

よ、なあ、めい公。」

「違えねえ。」

「だつて、貴郎は柄にないわ、主公様は大人し

く鯛魚とおつしやるもんです、ねえ、めのさん。」

「違えねえ。」

主税は色氣のない大息ついて、

「何にしる、あゝ腹が空いたぜ。」

「然うでせうツて、寝坊をするから、まだ朝御飯

を食らないもの。」

「違えねえ、確にアリヤ、」

と、め組は路地口へ伸上る。

「大分御執心のやうだが、何うした。」

と、め組の其の素振に目を着けて、主税は空腹だと云ふのに。・・・

「後姿に惚れたのかい。おい、最う可い加減なお婆さんだぜ。」

「だつて貴郎にやお婆さんでも、め組には似合ひな年紀ごろだわ。ねえ、一寸、」

「へへ、違えねえ。」

「よく、(違えねえ。)を云ふ人さ。」

「だから、確だらうと思ふんでさ。」

と呟いて獨で飲込み、仰向いて天秤棒を取りながら、

「旦那、」

「己ら御免だ。」と主税は懐手で一ツ肩を揺る。

「え、何を。」

「文でも届けてくれぢやないか。」

「御串戯。否さ、串戯は止して今のお客は直ぐに南町の家へ歸りさうな様子でしたかね。」

「む、づつと歸ると言つたつけ。」

「難有え、」

額をびつしやり。

「後を慕つて、おゝ然うだ、と遣れ。」

「行くのかい、河野さんへ。」

「一寸ね、」

「ぢや可いけれど。貴郎、」

と主税を見て莞爾して、

「めい公がね、又我儘を云つて困つたんですよ。」

お邸風を吹かしたり、お惣菜並に扱ふから、河野さんへは最う行かないツて。折角お頼まれなすつたものを、貴郎が困るだらうと思つて、是から意見をしてお遣らうと思つた處だつたのよ。」

「然うか。」

と何故か、主税は氣の無い返事をする。

「御覧なさい。然うすると急にあの通り。眞個に氣が變るつちやありやしない。まるで猫の目ね。」

「違えねえ、猫の目の犬の子だ。どつこい忙がしい、」

と荷を上げさうにするのを見て、

「待て、待て、」

「澤山よ。貴郎の分は三切あるわ。未だ昨日のも

残つてるぢやありませんか。めのさん、可いんだよ。
此の人にね、お前の盤臺を覗かせると、皆欲がるン
だから……」

「これ、」

旦那様苦い顔で、

「端近で何の事たい、野良猫に扱ひやあがる。」

「だつ……て、」

「め組も黙つて笑つてる事はない、何か言へ、營業の妨害をする婦だ。」

「肯かないよ、めの字、澤山なんだから、」

「まあ、お前、」

「否、澤山、大事な所帯だわ。」

「驚きますな。」

「私、最う障子を閉めてよ。」

「め組、此の體だ。」

「へへ、此奴ばかりや犬も食はねえ、いや、四寸づゝ食ひまし。」

「おい、待てと云ふに。」

「さつさとおいでよ、魚屋のやうでもない。」

「いや、遣瀬がねえ。」

と天秤棒を心にして、め組は一ツくるりと廻る。

「お菜かすのあとねだりをするんぢや、ないと云いふに。」

と笑わらひながらお蔭つたを睨にらんで、

「なあ、め組ぐみ。」

「えゝ、」

「これから河野かうのへ行くんだらう。」

「三枚さんまい並なみで駈かけ附つけまさ。」

「其それに就ついてだ、一寸ちよいと、此處こゝに話はなしが出来できた。」

「其の、河野へ行くに就いてだが、」

と主税は何か、言淀んで、

「何は、」

お蔭に目配せ、

「茶はないのか。」

「お茶ツて？有りますわ。ほゝほゝ、まあ、人に叱言を云ふ癖に、貴郎こそ端近で見ツともないぢやありませんか——ありますわ——さあ、彼方へ行らつしやい。」

と上らうとする臺所に、主税が立塞がつて居るので、袖の端を一寸突いて、

「さあ、」

め組は威勢よく、

「へい、跡は明晩……ぢやねえ、翌の朝だ。」

「待なツてば、」

「可いよ、めのさん。」

「はて、何うしたら、」と首を振る。

「お前たちは、」

と主税は呆れた顔で呵々と笑つて、

「相應に氣が利かないのに、早飲だからこんがらがつて仕様がなない。め組も又、さんざ油を賣つた癖に、急にそは／＼せずともだ。まあ、待て、己が話があると言へば。」

其處でだ・・・お茶と申すは、冷たい・・・

と口へつけて、指で飲む眞似。

「と行る一件だ。」

「め組に・・・」

「澤山だ、澤山だ。私なら、」

と聲ばかり澤山で、俄然として蜂の腰、龍の口、させ、飲まうの構になる。

「不可ません、最う飲んでるんだもの。此の上煽らして御覧なさい。また過日のやうに、一寸盤臺を預つとくんねえ、か何かで、」

お蔭は半纏の袖を投げて、婀娜に酔ッぱらひを、拳固で見せて、

「其ツ切り、五日の間行方知れずになつたふ。」

「旦那、恁こうなると頂きてえね、人間は依怙地なもんだ。」

「可いから、己が承知だから、」

「ぢや、め組に附合つて、是から遊びにでも何でもおいでなさい。お腹が空いたつて私、知らないから。さあ、其處を退いて頂戴よ、通れやしないわね。」

「あゝ、もし／＼、」

主税は身を躲して通しながら、

「御立腹の處を重々恐縮でございですが、お次手に、手前にも一杯、同じく冷いのを、」

「知りませんよ。」

とつゝと入る。

「旦那も、ゆすり方は素人ぢやねえ。なか／＼なか馴れてら、」

最う飲みかけたやうなものの言ひで、腰障子から首を突込み、

「今度八丁堀の私の内へ遊びに来ておくんせえ。一番私かね、嚙々左衛門に酒を強請る呼吸と云ふのをお目にかけます。」

「女房が寄せつけやしまい、第一吃驚するだらう、己なんぞが飛込んだぢや、山の手から猪ぐらゐに。所かはれば品かはるだ、なあ、め組。」

と下流へかけて板の間へ、主税は腰を掛け込んで、
「ところで、些と申かねるが、今の河野の一件
だ。」

「何です、旦那、」
と吃驚するほど眞顔。

「お前さんや、奥様で、私に言ひ憎いつて事はあ
りやしねえ、又私が承はつて困るつて事もねえぢや
ねえか。」

「鼻々を貸せとも言ひなさりやしめえ、早い話が。
何又御使ひ道がありや御用立て申します。」

「打附けた話が恚うだ。南町は些と君には遠廻り
の處を、是非廻つて貰ひたいと云ふもんだから、家
内で口を利いて行くやうになつたんだから、此處が
些と言ひ憎いのだが、今云つた、其、膚合の合はな
い處だ。」

「今來た、あの母親も、何の彼のつて云つて居るか
らな、最う彼家へは行かない方が可いぜ。心持を悪
くしてくれちや困るよ。又何だ、其内に一杯奢るか
ら。」

とまめやかに言ふ。

皆まで聞かず、め組は力んで、

「誰が、誰があんな許へ、私ア今も、だから然う云つてたんで、頼まれたツて行きやしねえ。」

「處が、又何か氣が變つて、三枚並で駈附けるなぞと云ふからよ。」

「そりや、何でさ、えゝ、一寸其の氣になりや成ツたがね、商ひになんか行くもんか。あの母親ツて奴を冷かしに出かける肝でさ。」

「然う云ふ料簡だから、お前、南町御構 ひになるんだわ。」

と盆の上に茶呑茶碗・・・不心服な二人分・・・焼海苔にはり／＼は心意氣ながら、極めて恭しからず押附ものに粗雑に持つて、お蔭が臺所へ顯れて、

「お客様は、め組の事を、何か文句を言つたんですか。」

「文句は此方にあるんだけれど、言分は先方にあつたのよ。」

と盆を受取つて押出して、

「さあ、茶を一つ飲み給へ。時に、お茶菓子にも言分があるね、最う些と何うか腹に溜り然うなものはないかい。」

「貴郎のやうに意地汚ではありません。め組は何にも食べやしないのよ。」

「食べやしねえばかりぢやありませんや、時々、此の所爲で食べられなくなる騒ぎだ。へへへ、」
と帽子を上へ扱上げると、元氣に額の皺を伸ばして、がぶりと一口。鵲鴿の尾の如く、左の人指をひよいと刎ね、ぐいと首を据ゑて、ペろ／＼と舌舐る。

主税はむしやりと海苔を頬張り、
「め組は可いが己の方さ、何とも以て大空腹の所だから。」

「ですから御飯になさいなね、種々な事を言て、お握飯を拵へるつて言ひかねやしないんだわ。」

「實は……」と莞爾々々、
「其の氣なきにしもあらずだよ。」

「可い加減になさいまし、め組は商賣がありますよ。疾くお話しなさいなね。」

「然う、然う。いや、可い氣なもんです。」

と縁底を一つ撫で、

「其の言分と云ふのは、慥うだ。何うも、あの魚屋も可いが、門の外から（おう）と怒鳴り込んで、（先公居るか。）は困る。此の間も御隠居をつかまへて、此奴あ婆さんに食はしてやれば、如何にも餘りです。内ぢやがえんに知己があるやうで、眞に近所へ極が悪い。それに、聞けば藝者屋待合なんぞへ、主に出入りをするんだ然うだから、娘たちの爲にもならず、第一家庭の亂れです。又風説によると、あの、魚屋の出入をする家は、何處でも工面が悪いつて事だから、かた／＼折角、お世話を願つたさうだけれど、宜しいやうに、貴下から・・・と先づ雑と慥うよ。」

め組より、お蔭が呆れた顔をして、

「わざ／＼其の斷りに來なすつたの。」

「然うばかりぢやなかつたが、まあ、其も一ツはあつた。」

「仰山だわねえ。」

「些と仰山なやうだけれど、お邸つき合ひのお勝手口へ、此の男が飛込んだんぢや、小火ぐらゐには吃驚したらう。馴れない内は時々火事かと思ふやう

な聲こゑで怒ど鳴なり込こむからな。是こゝや世せ話わをしたのが無む理りだつた。め組ぐみ怒おこつちや不可いけない。」

「分わかつた・・・」

と唐だし突ぬけに膝ひざを叩たたいて、

「旦那だんな、的てつ切きり然さうだ、だから、私わつしア違ちがえねえツて云いつたんだ。彼あいつ奴やつ、兇き状じやう持ぢだ。」

「えー」

何なんとしたか、主ち税から、茶ちや碗わん酒ぎけをふらりと持もつた手てが、キチンと極きまる。

「兇き状じやう持ぢえ？」とお蔦つたも袖そでを抱だいたのである。

め組ぐみは、何どこ處こか當あてなしに睨にらむやうに目めを据すゑて、

「其それを、私わつしア、私わつしア其それをね、ウイ、丁ちやんと知しつてるんだ。知しつてるもんだから、だもんだから・・・」

・・・

「ウイ、だから私が出入つちや、どんな事で暴露やうも知れねえと云ふ肚だ。此方あ臺所までだから、些とも氣がつかなくつたが、先方ぢや奥から見懸けたもんだね。一昨日頃静岡岡から出て来たつて、今も薦ちやんの話だつけ。」

「状あ見やがれ、もつと先から来て居たんだ。家風に合はねえも、近所の外聞もあるもんか、笑かしやあがら。」

と大きに氣勢ふ。

「何だ、何だ、兇状とは。」

「あの、河野さんの母様がかい。」

とお薦も眞顔で訝つた。

「あれでなくつて、兇状持は、誰なもんかね、」

「ほゝほ、貴郎、眞面目で聞くことはないんだわ。組の云ふ兇状持なら、あの令夫人があゝ見えて、内々大福餅がお好きだぐらゐなもんですよ。お彼岸にお萩餅を拵へたつて、自分の女房を敵のやうに云ふ人だもの。ねえ、然うだらう。めの字、何か甘いものが好なんだらう。」

「孰、何か隠喰さ、盗人上戸なら味方同士だ。」

「へ、其の通り、隠喰ひにや隠喰ひだが、喰つたものがね、」

「何だ、」

「馬でさ。」

「馬だと……」

「旅伴優かい。」

「否、馬丁……貞藏つて……馬丁で

ね。私が静岡に落ちてた時分の飲友達、旦那が戦争に行つた留守に、ちよろりと嘗めたが、病着で、
の出るほど食つたんだ。」

「主税は思はず乗出して、酒もあつたが元氣よく、

「眞個か、め組、眞個かい。」

「と事を好んだ聞きやうをする。」

「嘘よ、貴郎、あの方たちが、那樣ことがあつて
可いもんですか、めの字、滅多なことは云ふもんど
やありません、他の事と違ふよ、お前、」

「あれ、串戯ぢやねえ。是が嘘なら、私の鯛は場
違だ。え、旦那、河野の本家は静岡で、醫者だら
うね。そら、御覽じろ、河野ツてえから氣がつかな

かつた。門に大な榎があつて、榎邸と云や、お前、
興津江尻まで聞えたもんだね。

今見りや、此處を出た客てえのは、榎邸の奥様で、
其の馬丁の情婦だ。

だから私ア、冷かしに行つて遣らうと思つたんだ。

嘘にも眞個にも、兒があらあ、兒が。あゝ、

又一口がぶりと遣つて、はり、を嚙んだ齒をすゝ
つて、

「ねえ、大勢小兒がありません。」

「南町の學士先生も其の一人、何でも兄弟は大勢
ある。八九人かも知れないよ、いや、眞個なら驚い
たな。」

「おほ、待ちねえ、其の先生は幾歳だね。」

「六か、七だ。」

「二十とだね、すると其の上か、其とも下かね。」

どつち道其の人ぢやねえ。何でも馬丁の因果のたね
は婦人なんだ。孰縁附いちや居るだらうが、是ほど
確な事はねえ。私ア特別で心得てるんで、誰も知つ
ちやいますめえよ。知らぬは亭主ばかりなりぢやね
えんだから、御存じは魚屋惣助（本名）ばかりなり
だ。

はゝはゝ、下郎は口のさがねえもんだ。」

ぐいと唇を撫でた手で、ポカリと茶碗の蓋をした。
「危え、危え、冷かしく行く處ぢやねえ。鰻汁と

此奴だけは、命がけでも留められねえんだから、あ
の人のお酌でも頂き兼ねゝえ。軍醫の奥さんにお手
のものです、毒薬装られちや大變だ。だが、何だ、旦
那も知らねえ顔で居ておくんねえ、兎角町内に事な
かれたからね。」

「あゝ、お前もゝうおいでゞない。」

「行くもんか、行けつたつてお斷りだ。お斷り、

へゝへ、お斷り、」

と茶碗を捻くる。

「厭な人だよ。仕様がなないね、さあ、茶碗をお出

しなね。」

「おゝ、」

と何か考へ込んだ、主税が急に顔を上げて、

「最う些と精しく其の話を聞かせないか。」

井戸端から、婦人の風が切れて來たかと、お源が

一文字に飛込んだ。

「旦、旦那様、あの、何が、あの、あの／＼、」

お源の其の慌しさ、駈けて来た呼吸がひと、早口の急込に眞赤になりながら、直ぐに臺所から居間を突切つて、取次ぎに出る手廻しの、襷を外すのが膚を脱ぐやうな身悶えで、

「眞砂町の、」

「や、先生か。」

眞砂町と聞いたゞけで、主税は素直に突立ち上る。お薦はさそくに身を躲して、ひらりと壁に附着いた。

「否、お嬢様でございます。」

「嬢的、お妙さんか。」

と謂ふと齊しく、未だ酒のある茶碗を置いた塗盆を、飛上る足で蹴覆して、羽織の紐を引掴んで、横飛びに臺所を消えようとして、

「赤いか、」

お薦を見向いて面を撫でると、涼しい瞳で、其見たかと云ふ目色で、

「誰が見ても・・・。」と、ぐつと落着く。

「弱つた。」と頭を壓へる。

「朝湯々々、」と莞爾笑ふ。

「軍師なる哉、諸葛孔明。」といひ棄てに、ばた

／＼どんと出て行つたは、玄關に迎へるのである。

ふら／＼とした目を据ゑて、未だ未練にも茶碗を

放さなかつた、め組の惣助、満面の笑に崩れた、と

ろんこの相格で、

「いよう、天人。」と向ふを覗く。

「不可いよ、」

と強く云ふ、お蔭の聲が屹としたので、きよとん

として立つ處を、横合からお源の手が、ちよろりと

其の執心の茶碗を搔攪つて、

「失禮だわ。」

と極めつける。天下大變、吃驚して、黙つて天秤

の下へ潜ると、ひよいと盤臺の真中へ。向うの板塀

に肩を寄せたは、遠くから路を開く心得、する／＼

と是も出て行く。

最う、玄關の、格子が開きさうなものだと思ふと、

音もしなければ、聲もせぬので、お蔭が、

「御覽、」と目配せする。

覗くは失禮と控へたのが、遁腰で水口から目ばかり出したと思ふと、反返るやうに引込んで、

「大變でございます。お臺所口へいらつしやいます。」

「え、此方へ、」

と裾を捌くと、何と思つたか空を望み、破風から出さうにきりりと手繰つて、引窓をカタリと閉めた。

「あれ、奥様。」

「お前、其のお盆なんぞ、早くよ。」と釣鐘にでも隠れたさうに、肩から居間へ翻然と飛込む。

驚いたのはお源坊、二乎と成つて、唯くる／＼と働く目に、一目輝くと見たばかりで、意氣地なくへた／＼と坐つて、偏に恐入つてお辭儀をする。

「御免なさいよ。」

と優しい聲、はつと花降る留南奇の薫に、お源は恍惚として顔を上げると、帯も、袂も、衣紋も、扱帯も、花いろ／＼の立姿。まあ！紫と、水淺黄と、白と紅咲き重なつた、矢車草を片袖に、月夜に孔雀を見るやうな。

め組くみが勿返はねかへした流汁ながしるの溝溜どぶだまりも是これが爲ために水澄みづすんで、霞かすみをかけたる蒼空あそぞらが、底美そこうつくしく映うつるばかり。先祖せんぞが乙姫おとひめに戀歌こひうたして、恚かる處ところに流ながされた、蛙かへるの兒こよ、いでや、柳やなぎの袂たもとに似にた、君きみの袖そでに縋すがれかし。

妙子たへこは、有名いづめいな獨逸どいつ文學者ぶんがくしや、なにがし大學だいがくの教授けうじゆ、文學士ぶんがくし酒井俊藏さかぬしゆんざうの愛娘まなむすめである。

父様とうさんは、此この家やの主人あるじ、早瀬主税はやせちからには、先生せんせいで大恩人おんじん、且かつ御主おしうに當あたる。さればこそ、嬢様ぢやうさんと聞きくと齊ひとしく、朝あさから臺所だいどころで冷酒ひやだけのぐい煽あふり、魚屋さかなやと茶碗ちやわんを合あはせた、其その舉動ふるまい魔まの如ごときが、立處たちどころに影かげを潜ひそめた。

未だ其それよりも内證ないしよなのは、引窓ひきまどを閉しめたゝめ、勝かつ手の暗くらい……其その……誰だれだか。

妙子の手は、矢車の花の色に際立つて、溫柔な葉の中に、枝を一寸持替へながら、

「こんなものを持つていますから、此方から、」
と間違つてお源に氣の毒さう。ふつくりと優しく

微笑み、

「お邪魔をしてね。」

「何ういたしまして、最う臺なしでございました、」と雑巾を引搦んで、

「あれ、お召ものが、」

と云ふ内に、吾妻下駄が可愛く並んで、白足袋薄く、藤色の裾を捌いて、濃いお納戸地に、淺黄と赤で、撫子と水の繻珍の帯腰、向ふ屈みに水瓶へ、花菫の簪と、リボンの色が、蝶々の翼薄黄色に、ちら／＼と先づ映つて、矢車を挿込むと、五彩の露は一人である。

「此處に置かして頂戴よ。まあ、お酒の香がしてねえ、」と手を放すと、揺々となる矢車草より、薫ばかりも玉に染む、顔酔いて桃に似たり。「御覽

なさい、矢車が酔つてふら／＼するわ。」と罪もな
く莞爾する。

お源はどぎまぎ、

「え、酒屋の小僧が、ぞんざいだものでござい
ますから。」

「一寸、溢したの。矢張悪戯な小僧さん？ 犬には
つかり弄つて居るんでせう、私許のも同一よ。」

一廉社會觀のやうな口ぶり、説くが如く言ひなが
ら、上に乗つて、片手に其まで持つて居た、紫の風
呂敷包、眞四角なのを差置いた。

「お裾が汚れます、お嬢様。」

「否、可のよ、」

と襖は上げて、袖は板の間に敷くのであつた。

「あの、お惣菜になすつて下さい。」

「どうも恐れ入ります。」

「旨くはありませんよ、どうせ、お手製なんです
から。」

少し途切れて、

「お内ですか。」

「はい、」

「主税さんは・・・あの旦那様は、」

と言ひかけて、急に氣が着いたか、

「まあ、何うしたの、暗いのねえ。」

成程、其處までは水口の明が取れたが、奥へ行く

道は暗かつた。

「も、仕様がなないのでございますよ、眞個に、あら、何うしませう。」

とお源は飛上つて、慌てゝ引窓を、くるり、かたり。颯と明るく虹の幻、娘の肩から矢車草に。

爾時臺所へ落着いて顔を出した、主人の主税と、妙子は面を見合はせた。

「驚かして上げませうと思つただけれども。」

と、笑つて串戯を言ひながら、瓶なる花と對丈に、其處に娘が跪居るので、渠は謹んで板に片手を支いたのである。

「驚かしちや、私厭ですよ。」

「ぢや、何故那樣水口からなんぞお入んなさいます。丁と玄關へお出迎ひをして居るぢやありませんか。」

「それでもね、」

と愛々しく打傾き、

「お惣菜なんか持込むのに、お玄關からぢや大業
ですもの。それに、あの、花にも水を遣りたかつた
の。」

「綺麗ですな、まあ、お源、どうだ、綺麗ぢやな
いか。」

「眞個にお綺麗でございますこと。」

と、是は妙子に見惚れて居る。

「同じく頂戴が出来ますんで？」

「何うせうかしら。お茶を食るんなら可けれど、

お酒を飲んぢや、可哀相だわ。」

「え、酒なんぞ。」

「厭な、おほ、主税さん、飲んでるのね。」

「は、は、は、さ、まあ、二階へ。」

と遁出すやうな。後へする／＼衣の音。階子段の

下あたりで、主税が思出したやうに、

「成程、今日は日曜ですな。」

「どうせ、然うよ、（日曜）が遊びに來たのよ。」

二階の六畳の書齋へ入ると、机の向うへ引附けるは失禮らしいと思つたさうで、火鉢を座中へ持つて出て、床の間の前に坐り蒲団。

「どうぞ、お敷きなさいまし。」

主税は更つて、慇懃に手を支いて、

「まあ、よく入らつしやいました。」

「はい、」とばかり。長年内に居た書生の事、随分、我儘も言つたり、甘えたり、勉強の邪魔もしたり、悪口も言つたり、喧嘩もしたり。帽子と花簪の中であつた。が、さて恚うなると、心は同一でも兵子帯と扱帯ほど隔てが出来。主税も其の扱にすれば、お嬢さんも晴がましく、顔の色とおなぢやうな、毛巾を便りにして、姿と一緒にひら／＼と動かすと、畳に陽炎が燃えるやうなり。

「御無沙汰を致しまして済みません。奥様もお變りがございませんで、結構でございます。先生は相變らず……飲酒りますか。」

「誰か、と同一やうに……矢張り……」

・「と莞爾。落着かない坐りやうをして居るから、火鉢の角へ、力を入れて手を掛けながら、床の掛物に目を反らす。」

「主税は額に手を當て、」

「いや、恐縮。ですが今日のは、是や逆上せませんですよ。前刻朝湯に参りました。」

「父様もね、矢張朝湯に酔うんですよ。不思議だわね。」

「主税は胸を据ゑた體に、兩膝にぴたりと手を置き、平に、奥様には御内分。貴女又、早瀬が朝湯に酔つて居たなぞと、お話をなすつては不可ませんよ。」

「眞個に貴郎の半分でも、父様が母様の言ふことを肯くと可いんだけれど、學校でも皆が評判をするんですよ、人が悪いのはね、私の事を（お酌さん。）なんて冷評すわ。」

「結構ぢやありませんか。」

「厭だわ、私は。」

「だつて、貴女、先生がお嬢さんのお酌で快く御酒を召食れば、それに越した事はありません。後に

其の筋から御褒美が出ます。養老の灌でも何でも、昔から孝行な人物の親は、大概酒を飲みますものです。貴女を（お酌さん。）なぞと云ふ奴は、親の爲に焼芋を調べ、牡丹餅を買ひ・・・お茶番の孝女だ。」

と大に撥つて笑ふと、妙子は怨めしさうな目で、可愛らしく見たばかり。

「私は、最う歸ります。」

「御串戯をおつしやつては不可ません。是から其の焼芋だの、牡丹餅だの。」

「えゝ、私はお茶番の孝女ですから。」

「まあ、御褒美を差上げませう。」

と主税が引寄せる茶道具の、其處等を視めて、

「お客様があつたのね。お邪魔をしたのぢやありませんか。」

「否、最う歸つた後です。」

「厭な人ね？」

と唐突に澄まして云ふ。

「見たんですか。」

「見やしませんけれど、御覧なさいな。お茶臺に茶碗が伏つて居るぢやありませんか、お茶臺に茶碗

を伏せる人は、貴下嫌だもの、父様も。」

「天晴れ御鑑定、本阿彌でいらつしやる。」と急須子をあける。

「誰方なの？」

「御存じのない者です。河野と云ふ私の友達……」

「河野ね？主税さん。」と妙子はふつくりした前髪で打傾き、

「學士の方ぢやなくつて、」

「知つていらつしやるか。」と茶筒にかけた手を留めた。

「其の母様と云ふのは、四十餘りの、あの、若造りで、一寸お化粧なんぞして、細面の、鼻筋の通つた、何だか權式の高い、違つて？」

「眞個。何うして貴女、」

「私の學校へ、參觀に。」

「昨日は母様が来て御厄介でした。」

と、今夜主税の机の際に、河野英吉が、未だ洋服の膝も崩さぬ前から、

「君、困つたらう、母様は僕と違つて、威儀堂々と云ふ風で嚴肅だから、はゝは、」

と肩を揺つて、無邪氣と云へば無邪氣、餘り底の無さ過ぎるやうな笑方。文學士と肩書の名刺と共に、新いだけに美しい若々しい髻を押し揉んだ。些と目立つばかり口が大きいのに、似合はず聲の優しい男で。

氣焔を吐くのが愚痴のやうに聞きなされる事がある。尤も、何を爲るにも、福、徳とだけ襟を數へれば濟む身分。貧乏は知らないと言つても可いから、愚痴になるわけはないが、自分の親を、其の年紀で、友達の前で、呼ぶに母様を以てするのでも大略解る。酒に酔はずにアルコオルに中毒るやうな人物で。

年紀は二十七。從五位勳三等、前の軍醫監、同姓

英臣の長男、七人の同胞の中に英吉ばかりが男子で、
姉が一人、妹が五人、其の中縁附いたのが三人で。
姉は静岡の本宅に、然る醫學士を婿にして、現に病院を開いて居る。

南町の邸は、祖母さんが監督に附いて、英吉が主人で、三人の妹が、それ／＼學校に通つて居るので、既に縁組みした令嬢たちも、皆其處から通學した。別家のやうで且つ學問所、家嚴は是に桐楊塾と題したのである。漢詩の嗜がある軍醫だから、何等か桐楊の出處があらう、但し其義審ならず。

英吉に問ふと、素湯を飲むやうな事を云ふ。枝も榮へて、葉も繁ると云ふのだらう、松柏も古いから、其處で桐楊だと。

説を為すものあり、曰く、桐楊の桐は男兒に較べ、楊は令嬢たちに擬えたのであらう。漢皇重色思傾國……楊家女有、と同一字だ。道理こそ皆美人であると、それ或ひは然らむ。が男の方は、桐に鳳凰、とばかりで出處が怪しく、花骨牌から出たやうであるから、遂に孰方も信にはならぬ。

休憩、南町の桐楊塾は、監督が祖母さんで、同窓が嬢たちで、更に憚る處が無いから、天下泰平、家内安全、鳳凰は舞ひ次第、英吉は遊び放題。在學中も、雨桐はじめ烏金の絶倍で、屢々かいがんに及だのみか、卒業も二年ばかり後れたけれども、首尾よく學位を得たと聞いて、親たちは先づ占めた、びきで、あをたんの掴みだと思ふと、手八の蒔直しで夜泊の、晝流連。祖母さんの命を承けて、妹連から注進の櫛齒を挽くが如し。で、意見かたノ、然るベき嫁もあらばの氣構へで、此度母親が上京したので、妙子が通ふ女學校を參觀したと云ふにつけても、意のある處が解せられる。

「何うだい、君、窮屈な思ひをしたらう。」
親が参つて、嘸御迷惑、と惡氣は無い挨拶も、母様で、威儀で、嚴肅で、窮屈な思ひを、と云ふから、何と豪いか、恐入つたらう、と極めつけるが如くに聞える。

例の調子と知つて居るから、主税は別に氣にも留めず、勿論、恐入る必要も無いので、
「姑に持とうと云ふんぢやなし、些とも窮屈な事

はありません。」

机つくえのまへ前に鐵拐胡坐てつかあぐらで、悠然いうげんと煙草たばこを輪わに吹ふく。

「しかし、君きみ、其その自おのづから、何なんだらう。」

と其その何なんだか、火箸ひばしで灰はひを引搔ひつかいて、

「僕は窮屈きうくつで困こまる。母様かあさんが如彼あゝだから、自おのづから襟えり

を正たゞすと云いつたやうな工合くあひでね。・・・

直ちきの妹いもなんざ、随分ずぶん脱兔だつとの如ごとしだけれど、母様かあさんの

前まへぢや殆ど處女しよぢよだね。」

と髻ひげを捻ひねる。

「で、何かね、母様は、」
 と主税は笑ひながら、故と同一やうに母様と云つて、煙管を敲き、

「しばらく御滞在なんですかい。」

「一月ぐらゐ居るかも知れない、あゝ、」と火鉢に凭掛る。

「ぢや當分謹慎だね。今夜なぞも、是から眞直にお歸りだらう、何處へも廻りやしますまいな。」

「うふゝ、考へてるんだ。」と又灰に棒を引く。

「相變らず辛抱が出来ないか。」

「うむ、何、然うでもない。母様が可愛がつてくれるから、來て居る間は内も愉快だよ。賑ぢやあるし、料理が上手だからお菜も旨いし、君、昨夜は妹達と一所に西洋料理を奢つて貰つた、僕は七皿喰つた。はゝは、」

と火箸をポンと灰に投て、仰向いて、頬杖ついて、片足を鳶になる。

「御馳走と云へば内へ來るめ組だが、」

皆まで聞かず、英吉は突放したやうに、

「ありや君、最う来なくツても可いよ。餘り失禮な奴だと、母様が大變感情を害したからね、君から斷つてくれ給へ。」

と眞面目で云つて、衣兜から手巾をそゝくさ引張出し、口を拭いて、

「何うせ東京の魚だもの、誰のを買ったつて新しいのは無い。偶に盤臺の中で刎ねてると思や、蛆で蠹くか、然うでなければ比目魚の下に、手品の鱈が泳いでるんだと、母様が然う云つたつけ。」

め組が聞いたら、立處に汝の一命覺束ない、事を云つて、けろりとして、

「静岡は口の奢つた、旨いものを食ふ處さ。汽車の辨當でも試験へ、東海道一番だよ。」

主税は何處までも髯のある坊ちゃんにして、逆らわない氣で、

「いや、何か、手前どもで、め組のものを召食つて、大層御意に叶つたから、是非超越してくれと誰かが仰有るもんだから取あへず差立てたんだ。御家風を存じないでもなかつたけれども、承知の上で、

君が斷たつてと云つたから、

「僕は構はん。僕は構はんが、あの調子だもの、祖母さんや妹たちは固よりだ。故郷から連れて來て居る下女さへ吃驚したよ。母様は、僕を呼びつけて談じたです。あんなものに朋輩呼ばゝりをされるやうな悪い事をしたか。其處等の藝妓にや、魚屋だの、蒲鉾屋の職人、蕎麦屋の出前持の客が有ると云ふから、お前、何處ぞで一座でもおしだらう、とね、叱られたです。」

僕は何、彼は通りもんです。早瀬の許へ行つても、同一く、今日は旨えものを食はせて遣らう。居るか、と云つた調子です、と云つたら、母様が云ふにや、當前だ、早瀬ぢや、細君……」

と云ひかけて、ぐつと支へたが、ニヤリとして、
「君、僕は饒舌りやしないよ。僕は決して饒舌らんさ。秘密で居ることを知つてるから、君の不利益になるやうな事は云はないがね、妹たちが知つてるんだ。何處かで聞いて來てたもんだから、ついね、」
と氣の毒さう。

「まあ、可い、そんな事は構はないが、僕と懇意

にしてくれるんなら、最う些と君、遊蕩を控へて貰ひたいね。

昨日も君の母様が来て、つく／＼く若様の不始末を愚痴るのが、何だか僕が取巻きでもして、わつと浮かせるやうぢやないか。

高利を世話して、口銭を取る。酒を飲ませてお流頂戴。切々内へ呼び出しちや、花骨牌でも撒きさうに思つてるんだ。何の事はない、美少年録のソレ何だつけ、安保箭五郎直行さ。甚しきは美人局でも遣りかねないほど輕蔑して居ら。母様の口ぶりが、

と稍其の調子が強くなつたが、急に事も無げな串戯口、

「え、隊長、些と謹んでくれなぬか。」

「母様の来て居る内は謹慎さ。」

と灰を掻きまわして、

「其の代り、西洋料理七皿だ。」と火箸をバタリ。

「ぢやあ色氣より食氣の方だ、何だか自棄に食ふやうぢやないか。しかし、まあ其で濟みや結構さ。」

「濟みやしないよ、七皿のあとが、一銚子、玉子に海苔と来て、おひけとなると可いんだけれど、矢張一人で寝るんだから、大きに足が突張るです。其に母様が来たから、些とは小遣があるし、二三時間に駈出して行つて来ようかとも思ふ。何うだらう、君、迷惑をするだらうか。」

と甘えるやうな身體つき、座蒲団にくつたりして、横合から覗いて云ふ。

「何が迷惑さ。君の身體で、御自分お出かけなさるに、些とも迷惑な事はない。迷惑な事はない

が………」

「否、處が今夜は、君の内へ来たことを、母様が知つてるからね。今のやうな話ぢや、又君が引張出したやうに、母様に思はれやうかと、心配をするだらうと云ふんだ。」

「お疑ひなさるは御勝手さ。癩に障ればつたつて、恐い事、何あるものか、君の母親が何だ？」

と云ひかけて、語氣をかへ、

「然う云つ了へば、實も蓋もない。痛くない腹を探られるのは、僕だつて厭だ。それにしても早瀬へ遊びに行くと云ふ君に、よく故障を入れなかつたね。」

「うむ、そりや彼です、君に逢はない内は疑つて居ないでもなかつたがね、」

敢て臆面は無い容子で、

「昨日逢つてから、然うした人ぢやないやうだ、と頷いて居た。母様はね、君、目が高いんだ、所謂士を知る明ありだよ。」

「ぢや、何か、士を知る明があつて、其で、何か、然うした人ぢやないやうだ、（やうだ。）と未だ疑があるのか。」

「だつて唯一面識だものね、三四度交際つて見給へ。丁と分るよ、五度とは言はない。」

「何も母様に交際ふには當らんぢやないか。せめて年増でゝもあればだが、最う婆さまだ。」

と横を向いて、微笑んで、机の上の本を見た。何の書だか酒井藏書の印が見える。眞砂町から借用のものであらう。

英吉は、火鉢越に覗きながら、其の段は見るでも

なく、

「年紀は取つてるけれど、未だ見た處は若いよ。」

君、婦人會なんぞぢや、後姿を時々姉と見違えらるるさ。

で、何だ、然うやつて人を見る明が有るもんだから、婿の選擇は残らず母様に任せてあるんだ。取當てるよ。君、内の姉の婿にした醫學士なんぞ大當りだ。病院の立派になつた事を見給へな。」

「僕なんぞ御選擇に預れまいか。」

と氣を、其の書物に取られたか、木に竹を接いだやうな事を云ふと、以ての外眞面目に受けて、

「君か、君は何だ、學位は持つちや居らんけれど、獨逸のいけるのは僕が知つてるからね。母様の信用さへ得てくれりや、何だ。えゝ君、妹たちには、固より評判が可いんだからね、色男、はゝは、」

と他愛なく身體中で笑ひ、

「だつて、如何する。階下に居るのを、」

背後を見返り、

「湯かい。見えなかつたやうだつて。」

主税は堪へず失笑したが、向直つて話に乗るやうに、

「まあ、可い加減にして、疾く一人貰つちや何うだ。人の事より御自分が。然うすりや遊蕩も留みます。安保箭五郎悪い事は言はないが、何だ。」

「むゝ、其の事だがね。」

とぐつたりしていた胸を起して、又手巾で口を拭いて、何爲か、縞のズボンを揃へて、丁と畏まつて、

「實は其の事なんだ。」

「何が其の事だ。」

「矢張其の事だ。」

「いづれ其の事だらう。」

「えゝ、知つてるのか。」

「些とも知らない、」

と煙管を取つて、

「いや、眞面目に／＼、何か、心當りでも出来た

かね。」

時に河野が其事と言へば、孰れ婦に違ひないが、早瀬は何時も此の人から、其の収紅拾紫、鶯を鳴かしたり、蝶を弄んだりの件に就て、いや、あゝ云つたが是は何と、恚う申したが其は如何。無心をされたが何うしたもののか、成るべくは斷りたい、斷つたら嫌はれやうか、嫌はれては甚だ不好い。一體戀でありながら金子をくれるは變な工合だ、妙だよ。其の意志のある處を知るに苦む、などゝ、二紅をさして、蚯蚓までも突附けて、意見？を問はれるには恐れて居る。

誇るに西洋料理七皿を以てする、式の如き若様であるから、冷評せば眞に受ける、打棄つて置けば惜げる、はぐらかしても乗出す。勢い可い加減にでも返事をすれば、即ち期せずして遊蕩の顧問になる。尠からず惱まされて、自分にお薦と云ふ弱點があるだけ、人知れず冷汗が習であつたから、其の事なら最う聞くまい、と手強く念を入れると、今夜はズボ

ンの膝を畏つたゞけ大眞面目。尤も馴染の相談も串
戯ではないのだけれども。特に更つて、つひにない
事、もじ／＼して、

「實はね、母様も云つたんだ、君に相談をして見
ると・・・」

「縁談だね、眞面目な。」

珍らし然うに顔を見て、

「母様から御聲懸りで、僕に相談と云ふ縁談の口
は、當時心當りが無いが。あゝ、」

と軽く膝を叩いた。

「隣家のかい。むゝ、彼は別嬪だ。一寸高慢ぢや

あるが、其のかはり學校はなか／＼出来るさうだ。」

英吉は小兒のやうに頭を振つて、

「うゝむ、違ふよ。」

「違ふ。ぢや誰だい。」

と落着いて尋ねると、慌てゝ衣兜へ手を突込み、

肩を高うして、一ツ揺つて、

「眞砂町の、」

「眞砂町!？」

と聞くや否や、鸚鵡返しに力が入つた。床の間に
しつとりと露を被いだ矢車の花は、燈の明を餘所に、

暖か過ぎて障子を透した、富士見町あたりの大空の星の光を宿して、美しく活つて居る。

見よ、河野が座を、斜に避けた處には、昨日の袖の香を留めた、友染の花も、綾の霞も、畳の上を消えないのである。

眞砂町、と聞返すと齊しく、屹と其の座に目を注いだ、驚破と謂はゞ身を以て、影をも守らむ意氣組であつた。

英吉は又火箸を突支棒のやうにして、押立尻をしながら、火鉢の上へ乗掛つて、

「あの、酒井ね、君の先生の。彼處に娘があるんだね。」

「あるさ、」と云つたが、餘り取つても着けないやうで、我ながら冷かに聞えたから、

「知らなかつたかな、君は。随分其の方へかけちや、脱落はあるまいに。」

「洋燈臺下暗しで、（と大に洒落れて、）薩張氣が付かなかつた。君ン許へもちよい／＼遊びに来るんだらう。」

「お成りがあるさ。僕には御主人だ。」

「ぢや一度ぐらゐ逢ひさうなものだつた。」

何か残惜く、かごとがましく、不平さうに謂つたのが、何故見せなかつた、と詰るやうに聞えたので、早瀬は石を突流す如く、

「縁が無かつたらうよ。」

「處があります、はゝは、」と、此處で又相好と、もに足を崩して、ぐたりと横坐りに成つて、

「思ふに逢はずして思はざるに……ぢやない。向ふも来れば僕も来るのに、此家で逢ひさうなものだつたが、然うでなくつて君、學校で見たよ。

あゝ、あの人の行く學校で、妙子さんの行く學校で。」

と、何だか話しに乘らないから、畳かけて云つた。妙子、と早や名の此の男に知られたのを、早瀬は其人の爲に恥辱のやうに思つて、不快な色が眉の根に浮んだ。

「如何うして、學校で、」

と此際故と尋ねたのである。母子で參觀したことは、最う心得て居たのに。

「如何も恚うも無いさ。母様と二人で參觀に出掛けたんだ。教頭は僕と同窓だからね。先から来て見い、来て見い、と云ふけれど、顔の方ぢや大した評判の無い學校だから、馬鹿にしていたが驚いたね。勿論五年級にや佳いのが居ると云つたつけが、」

「ぢやあ其の教頭、媒酌人も遣るんだな。」

と舌尖三分で切附けたが、一向に感じないで、

「遣るさ。其のかはり待合や、何かぢや、僕の方が媒酌人だよ。」

「怪しからん。黒と白との、待て？海老茶と緋縮緬の交換だな。いや、可い面の皮だ。づらりと竝べて選取りにお目に掛けます、小格子の風だ。」

「可いぢやないか、學校の目的は、良妻賢母を造るんだもの、生理の講義も聞かせりや、媒酌もしようぢやあないか。」

と此の人にして大警句。早瀬は恐入つた體で、
「成程、」

「勿論人を見てするこつた、幾干媒酌人をすればツて、人毎に許しやしない。其處は地位もあり、財

産もあり、學位も有るもんなら、

と自若として、自分で云つて、意氣頗る昂然焉で、
「講堂で良妻賢母を拵へて、丁と父兄に渡す方が、
雙方の利益だもの。教頭だつて、其處は考へて居る

よ。」

「で何かね、」

早瀬は、斜めに開き直つて、

「其處で僕の、僕の先生の娘を見たんだな。」

「あゝ、しかも首席よ。出来るんだね。然うして

見た處、優美で、品が良くつて、愛嬌がある。澤山

ない、滅多にないんだ。高級三百顔色なし。照陽殿

裏第一人だよ。恰も可、學校も照陽女學校さ。」

と冷えた茶をがぶりと一口。浮かれの體とおいで

なすつて、

「はは、僕ばかりぢやない、第一母様が氣に入つ

たさ。彼なら河野家の嫁にしても、まあ／＼・・・

・・恥 かしくない、と云つて、教頭に尋ねたら、

酒井妙子と云ふんだ。一寸、教員室で立話しをした

んだから、委いことは追てとして、其日は歸つた。

すると昨日、母様が此處へ訪ねて來たらう。歸り

がけに、飯田町から見附を出やうとする處で、腕車

を飛ばして来た、母衣の中のが其だツたつて、矢車の花を。」

と言ひかけて、床の間を凝と見て、

「あゝ、是だ／＼。」

ひよいと腰を擡げて、這身にぬいと手を伸ばした様子が、一本引抜きさうに見えたので、

「河野！」

「えゝ、」

「其から。おい、肝心な處だ。フム、」
乗つて出たのに引込まれて、ト居直つて、

「あの砂埃の中を水際立つて、駈け抜けるやうに、そりや綺麗だつたと云ふのだ。立留つて見送ると、此の内の角へ車を下ろしたらう。」

徐々引返したんです、母様がね。休んで居た車夫に、今のお嬢さんは眞中の家へですか。へい、然やうで、と云ふのを聞いて歸つたのさね。」

と早口に饒舌つて、

「美人だねえ。君、」とゆつたり顔を見る。

「ト遣つた工合は、僕が美人のやうだ、厭だ。結婚なんぞ申込ぢや、」と笑ひながら、大に諷するかの如くに云つて、丁と肩を突いて、

「浮氣ものめ。」

「浮氣ぢやない、今度ばかりしゃ大眞面目だがね、君、何うかなるまいか。」

「又甘えるやうに、顔を正的に差出して、頤を支へた指で、頻に忙く髯を捻る。」

早瀬はしばらく黙つたが、思はず拱いていた腕に解くと、背後ざまに机に肱、片手を緊乎と膝に支いて、

「貰ふさ。」

「え。」

「お貰ひなさい。」

「くれやうか。」

「話によつちや、くれませう。」

「後繼者ぢやないんだね。」

「勿論後繼者ぢやあない。」

「ぢや、まあ、話は出来るとして、」と、澄まして云つて、今度は心ありげに早瀬の顔を。

「だが、何だよ、私ア」と云つた調子が變つて、

「媒介人は斷るぜ、照陽女學校の教頭ぢやないんだから。」

然うする と英吉が、豫て心得たりの態度で、媒
 酌人は勿論、然るべき人と云つたのが、其許如き
 に勤まるものかと、輕んじ賤しめたやうに聞えて、

「そりや、いざとなりや、教育界に名望のある道
 學者先生の叔父もあるし、又父様の幕下で、現下其
 筋の顯職にある人物も居るんだから、立派に遣つて
 くれるんだけれど、其の君、媒酌人を立てるまで

に、
 と手を揃へて、火鉢の上へ突出して、じりりと進

み、

「先方の身分も確めねばならず、妙子、（と最う
 呼棄てにして）の品行の點もあり、まあ、學校は優
 等としてだね。酒井は飲酒家だと云ふから、遺傳性
 の懸念もありだ。其は大大としてからが、あゝ云ふ
 美しいのには有り勝だから、肺病の憂があつてはな
 らず、酒井の親屬關係、妙子の交友の如何、其處等
 を一ツ委しく聞かして貰ひたいんだがね。」

主税は堪り豫て、ぱり／＼と烏府の中を突崩した。

此の暖いのに、河野が兩手を翳すほど、火鉢の火は消えかゝつたので、彼は炭を繼がうとして横向になつていたから、背けた顔に稲妻の如く閃いた額の筋は見えなかつたが、

「最う一度聞こう、何だっけな。先方の身分？」

「うむ、先方の身分さ。」

「獨逸文學者よ、文學士だ……大學教授よ。」

知つてるだらう、私の先生だ。」

「むゝ、そりや分つてるがね、妙子の品行の點も

あり、」

「其から、」

「遺傳さ、」

「肺病かね、」

「親族關係、交友の如何さ。何、友達の事なんぞ、

大した條件ではないよ。結婚をすれば、處女時代の

交際は自然に疎くなるです。其に母様が厳しく躰れ

ば、其の方は心配はないが、むゝ、未だ要點は財産

だ。が、酒井は困つていやしないだらうか。誰も知

つた侠客風の人間だから、人の世話をすりや、つい

物費も少くない。其上にや、評判の飲酒家だし、遊

ぶ方も盛だと云ふし、借金は何うだらう。」

主税は黙つて、茶を注いだが、強いて落着いた容
子に見えた。

「何かね、持参金でも望みなのかね。」

「馬鹿を謂ひ給へ。妹たちを縁附けるに、此方か
ら持参はさせるが、僕が結婚するに、いやしくも河
野の世子が持参金などを望むものか。」

君、僕の家ぢや、何だ、女の兒が一人生れると、
七夜から直ぐに積立金をするよ。それ立派に支度が
出来るだらう。結婚してからは、其の利息が化粧料、
小遣となるうと云ふんだ。自然嫁入先でも幅が利き
ます。尤も其の金を、婿の名に書き替るわけぢやな
いが、河野家に於てさ、一人々々の名にして保管し
てあるんだから、例へば婿が多日月給に離れるやう
な事があつても、忽ち破綻を生ずる如き不面目は
無い。

と云ふ圓満な家庭に成つて居るんだ。で先方の財
産は望ぢやないが、餘り困つて居るやうだと、親族
の關係から、つい迷惑をする事になつちや困る。娘
の縁で、一時借用なぞと云ふのは有がちだから。」

「酒井先生は江戸兒だ！」

と唐突に一喝して、

「神田の祭禮に叩き賣つても、娘の縁で借りるもんかい。河野！」

と屹と見た目の鋭さ。眉を昂げて、

「髯があつたり、本を読んだり、お互の交際は窮屈だ。撲倒すのを野蛮と云ふんだ。」

お蔭は湯から歸つて来た。艶やかな濡髪に、梅花の匂馥郁として、繻子の襟の烏羽玉にも、香やは隠るゝ路地の宵。格子戸を憚つて、臺所の暗がりへ入ると、二階は常ならぬ聲高で、お源の出迎へる氣勢もない。

石鹼を巻いた手拭を持つたまゝで、竊と階子段の下へ行くと、お源は扉に附着いて、一心に聞いて居た。

「先生が酒を飲まうと飲むまいと、借金が有らうと無からうと、大きなお世話だ。遺傳が、肺病が、品行が何だ。當方からお給事をしようと云ふんぢやなし、第一欲しいと仰有つたつて、差上げるやら、平に御免を被るやら、其邊も分らないのに、人の大切な令嬢を、裸體にして検査するやうな事を聞くのは、無禮ぢやないか。」

私あ第一、河野。世間の宗教家と稱うる奴が、吾々を捕へて、罪の兒だの、救つてやるのと、商賣柄好きな事を云ふ。藥屋の廣告は構はんが、しらきちやうめんな人間に向つて罪の子とは何んだい。本人は兎も角も、其の親たちに對して怪しからん言種だと思つてるんです。

今君が尋問に及むだ、先生の令嬢の身許檢べの條件が、唯の一ヶ條でもだ。河野英吉氏の意志から出たのなら、私は最う學者や紳士の交際は御免蒙る。其のかはりだ、半纏着の附合ひに成つて撲倒すよ。

はゝはゝ、えい、おい、
と調子が碎けて、

「母様の指揮だらう、一々。私は恚うして懇意にして居るからは、君の性質は知つてるんだ。君は惚れたんだらう。一も二もなく妙ちやんを見染たんだ。」

「うゝ、まあ……」と相手の血相もあり、もじ／＼する。

「惚れてよ、可愛い、可憐いものなら、何故命がけに成つて貰はない。」

結婚をしたあとで、不具になるうが、肺病になるうが、又其の肺病がうつゝて、其が爲に共々倒れやうが、そんな事を構ふもんか。

まあ、何は措いて、嫁の内の財産を云々するんなら、不埒の到だ。萬々一、實家の親が困窮して、都合に依つて無心合力でもしたとする。可愛い女房の親ぢやないか。自分にも親なんだぜ、餘裕があつたら勿論貢ぐんだ。無ければ斷る。が、人情なら三杯食ふ飯を一杯づゝ分るんだ。着物は下着から脱いで遣るのよ。」

と思ひ入つた體で、煙草を持つた手の尖がぶる／＼と震へると、相手の河野は一向氣にも留めない様子で、唯上の空で聞いて首だけ垂れていたが、却て

襖の外で、思はずはら／＼と落涙したのはお蔭である。

何の話？ と聲の勵いのを憂慮つて、階子段の下で竊と聞くと、縁談でございますよ、とお源の答へに、え、旦那の、と湯上りの颯と上氣した顔の色を變へたが、否、河野様が御自分の、と聞いて、まあ、と呆れたやうに莞爾して、忍んで段を上つて、上り口の次の室の三畳へ、欄干を擦つて拔足で、兩方へ開けた襖の蔭へ入つたのを、兩人には氣が付かずに居るのである。

と河野は自分には勢のない、聞くものには張合のない口吻で、

「だが、母さんが、」

「母様が何だ。母様が娶うんぢやあるまい、君が女房にするんぢやないか。例でも其の遣方だから、いや、縁談にかゝつたの、見合をしたの、と屢々聞かされるのが一々勘定はせんけれども、雑と三十ぐらゐあつた。其の内、君が、自分で斷つたのは一ツもあるまい。皆母さんが恚う云つた。叔父さんが、

あゝだ、父さんが、それだ、と難癖を付けちや破談だ。

君の一家は、凡そ何のくらゐな御門閥かは知らん。河野から縁談を申懸けられる天下の婦人は、いづれも恥辱を蒙るやうで、豫て不快に堪へんのだ。

昔の國守大名が繪姿で捜せば知らず、そんな御注文に應ずるのが、えゝ、河野、何處にだつてあるものか。」

と果は歎息して云ふのであつた。河野は急に景氣づいて、

「何、無いことはありません。そりや有るよ。君、僕ン許の妹たちは、誰でも其の註文に應ずるやうに仕立てゝあるんだ。

揃つて容色も好、又不思議に皆別嬪だ。知つてるだらう。生れたての嬰兒の時は、随分、をかした、色の黒いのもあるけれど、母さんが手しほに掛けて、妙齡にするまでには、兎も角も十人並以上になるんだ、ね、然うぢやないか。」

主税は返す言もなく、是には否應なく頷かされたのである。蓋し事實であるから。

「其から、財産は先刻も謂つた通り、一人一人に用意がしてある。病氣なり、何なりは、父様も兄も本職だから注意が届くよ。其他は萬事母様が預かつて賤けるんだ。」

好嫌は別として、此方で他に求める條件だけは、丁と此方にも整へてあるんだから、強ち身勝手ばかり謂ふんぢやない。

けれども、品行の點は、疑へば疑へると云ふだらう。其處はね、性理上も斟酌をして、徐々色氣が、と思ふ時分には、妹たちが、未だ／＼自分で、男を何うの恂うのと云ふ惡智慧の出ない先に、親の鑑定で、婿を見附けて授けるんです。

否も應も有りやしない。衣服の柄ほども文句を謂はんさ。謂はない筈だ、何にも知らないで授けられるんだから。しかし間違ひはない、其處は母さんの目が高いもの。」

「すると何かね、婿を選ぶにも、凡そ其の條件が

満足に解決されないと不可のだね。」

「勿論さ、だから、皆圓滿に遣つとるよ。第一の姉が醫學士さね、直の妹の縁附いて居るのが、理學士。其の次のが工學士。皆食いはぐれはないさ。……今又話しのある四番目のも醫學士さ、」

「妙に選取つて揃へたもんだな。」

「應、其は父様の主義で、兄弟一家一門を揃へて、天下に一階級を形造らうと云ふんだ。成るべくは、銘々夫々の収入も、一番の姉が三百圓なら、次が二百五十圓、次が二百圓、次が百五十圓、末が百圓と云つた工合に長幼の等差を整然と附けたいと云ふわけだ。」

「先づ行はれて居る、今の處ぢや。而して其の子、其の孫、と次第に此の社會に於ける地位を向上しようと云ふのが理想なんです。例へば、今の代が學士なら、其の次が博士さ、大博士さね。君。」

「謂つて見れば、貴族院も、一家族で一黨を立てることが出来る。内閣も一門で組織し得るやうにと云ふ遠大の理想があるんだ。又幸に、父様にや孫も八

九人出来た。姪を引取つて教育して居るのも三四人ある。着々として歩を進めて居る。何でも妹たちが人才を引着けるんだ。」

人事ながら、主税は白面に紅を潮して、

「ぢや、君の妹たちは、皆學士を釣る餌だ。」

「餌でも可い、構はんね。藤原氏の為だもの。一人や二人犠牲が出来ても可いが、そりや大大心配なしだ。親たちの目は曇りやしない。」

次第々々に地位を高めやうとするんだから、奇才俊才、傑物は不可ん。然う云ふのは時々失敗を遣る。望む處は凡才で間違ひの無いのが可いのだ。正々堂々の陣さ、信玄流です。小豆長光を翳して旗下へ切込むやうなのは、快は快なりだが、永久持重の策にあらず……

其の理想に於ける河野家の僕が中心なんだらう。其の中心に据らうと云ふ妻なんだから、大に慎重の態度を取らんけりや成らんぢやないか。詰り一家の女王なんだから、

河野は、渠が所謂正々堂々として説くこと一條。

其理想に於ける根ざしの深さは、此の男の口から言つても、例の愚痴のやうに聞えるのや、其の落着かない腰には似ない、殆ど動かすべからざる、確乎としたものであつた。

「いや、能く解つた、成程其の主義ぢや、人の娘の體格検査をせざあなるまい。しかし私は厭だ！私の娘なら斷るよ、例ひ御試験には及第を致しまして、も、」

と冷かに笑ふと、河野は人物に肖ず、此には傲然として、信ずる處ある如く、合點んだ笑ひ方をして、
「でも、條件さへ通過すれば、僕は娶うよ。は、は、屹と貰うね、おい、一本貰つて行くぜ。」

と脱兎の如く、豫て計つて居たやうに、此の時ひよいと立つと、肩を斜めに、衣兜に片手を突込んだまゝ、急々と床の間に立向うて、早や手が掛つた、花の矢車。

片膝立てゝ、颯と色をかへて、

「不可いよ。」

「何故かい？」

と濟すまして見返みかへる。主税ちからは、稍やあせつた氣味きみで、

「何故なげと云いつて、」

「はゝはゝ、其處そこが、肝心かんじんな處ところだ、と母様かあさんが云いつ

たんだ。」

と突立つゝたつたまゝ、ニヤリとして、

「早瀬はやせ、君きみが何どうかして居ゐるんぢやないか、えゝ、

おい、妙子たへこを。」

冷か、熱か、匕首、寸鐵にして、英吉の其の舌の根を留めようと急つたが、咄嗟に針を吐く能はずして、主税は黙つて拳を握る。

英吉は、此處ぞ、と土俵に仕切つた形で、片手に花の茎を引摺み、片手で髯を捻りながら、目をぎろ／＼と………但冴えない光で、

「だらう、君、筒井筒振分髪と云ふんだらう。其なら然う云ひ給へ、僕の方にも又手加減があるんだ、何うだね。」

信玄流の敵が、却て此の奇兵を用ゐたにも係らず、主税の答へは車懸りでも何でもない、極めて平凡なものであつた。

「怪しからん事を云ふな、串戯とは違ふ、大切なお嬢さんだ。」

「其の大切のお嬢さんを何うかして居るんぢやないか、其とも心で思つてるんか。」

「怪しからん事を云ふなと云ふのに。」

「ぢや確かい。」

「御念には及びません。」

「そんなら何も、然う我が河野家の理想に反對して、人が折角聞こうとする、妙子の容子を秘さんでも可いぢやないか。話が纏まりや、其の人にも幸福だよ、河野一黨の女王になるんだ。」

「幸か、不幸か、そりや知らん、が、私は厭だ。一門の繁榮を望むために、娘を餌にするの、嫁の體格検査をするの、と云ふのは眞平御免だ。惚れたからは、癩でも肺病でも構はんのでなくつちや、妙ちやんの相談は決してせん。勿論お嬢は瑕のない玉だけれど、露出しにして河野家に御覽に入れるのは、平相國清盛に招かれて月が顔を出すやうなものよ。」
「と聊か云ひ得て濃い煙草を吻と吐いたは、正に慙の如く、山の端の朧氣ならん趣であつた。」

「なら可い、君に聞かんでも餘處で聞くよ。」
と案外又英吉は廉立つた様子もなく、争や勝てり
の態度で、

「しかし縁起だ、是や一本貰つて行くよ。妙子が御持参の花だから、」

「君が何うと云ふ事も無いのなら、一本二本惜む

にや當るまい、こんなに澤山あるものを、

「・・・・・・・・」

「失敬、」

あわや抜き出さうとする。と床しい人香が、はつと襲つて、

「不可ませんよ。」と半纏の襟を扱きながら、お蔭が襖から、すつと出て、英吉の肩へ手を載せると、蹠跟けるやうに振向く處を、入違ひに床の間を背負つて、花を庇つて膝をついて、

「厭ですよ、私が活けたのが臺なしになります。」と嫣然として一笑する。

「だつて、だつて君、突込んであるんぢやないか、池の坊も遠州もありやしない。些とぐらゐ抜いたつて、敢てお手前が崩れると云ふでもないよ。」

とさすがに手を控へて、例の衣兜へ突込んだが、お蔭の目前を、（子を捉る、子捉る。）の體で、靴足袋で、どたばた、どたばた。

「はい、是は柳橋流と云ふんです。柳のやうに房々活けてありませう、ちゃんと流儀があるぢやありませんか。」

「嘘を吐き給へ、まあ可いから、僕が惚込んだ花だから。」

主税は火鉢をぐつと手許へ。お蔭はすらりと立て、

「だつて最う主のある花ですもの。」

「主がある！」と目を＝る。

「え、ありますとも、主税と云つてね。」

「其見ろ、早瀬、」

「何だ、お前、」

「否、貴下、此の花を引張るのは、私を口説くのと同一譯よ。主があるんですもの。さあ、引張つて

御覧なさい。」

と寄ると、英吉は一足引く。

「さあ、口説いて頂戴、」

と寄ると、英吉は一足引く。微笑みながら擦り寄

るたびに、たち／＼と退つて、やがて次の間へ、もそりと出る。

道學先生

二十二

月の十二日は本郷の薬師様の縁日で、電車が通るやうに成つても相かはらず賑かな。書肆文求堂を最う些と富坂寄の大道へ出した露店の、如何はしい道具に交せて、ばら／＼古本がある中の、表紙の除れた、けばの立つた、端摺の甚い、三世相を開けて、燻ぼつたカンテラの燈で見て居る男は、是は、早瀬主税である。

何の事ぞ、酒井先生の薰陶で、少くとも外國語をもつて家をして、自腹で朝酒を呷る者が、今更如何なる必要があつて、前世の鸚鵡たり、猩々たるを懸念する？

尤も學者だと云つて、天氣の好い日に淺草をぶらついて、奥山を見ないと限らぬ。爾時如何なる必要があつて、玉乗の看板を観ると云ふ、奇問を發するものがあれば、其の者愚ならずんば狂に近い。鰻屋の前を通つて、好ひ匂がしたと云つても、直ぐに隣の茶漬屋へ駈込みの、箸を持ちながら嗅ぐ事をし

ない以上は、速断して、伊勢屋だとは言憎い。

主税とても、たゞ通りがりに、露店の古本の中にあつた三世相が目を遮つたから、見たばかりだ、と言へば其まである。けれども、渠は目下誰かの縁談に就いて、配慮しつゝあるのではない歟。然も開けて見て居る處が――夫婦相性の事――は棄置かれぬ。

且つ其の顔色が、紋附の羽織で、■の厚い内君と、水兵服の坊やを連れて、別に一人抱いて、鮫にしよるか、汁粉にしようか、と歩行つて居る紳士のやうな、平和な、樂しげなものではなく、主税は何か、思ひ屈した、沈んだ、憂はしげな色が見える。

好男子世に處して、屈託さうな面色で、露店の三世相を繰るとなると、柳の下に掌を見せる、八卦の亡者と大差はない、迷いは寧ろ其以上である。

所以ある哉、主税の其の面上の雲は、河野英吉と床の間の矢車草……お妙の花を争つた時から、早や其の影が懸つたのであつた。爾時はお蔦の機知で、柔能く強を制することを得たのだから、例なら、

いや、女房は持つべきものだ、と差對ひで祝杯を擧げかねないのが、冴えない顔をしながら、湯は込んで居たか、と聞いて、フイと出掛けた様子も、其縁談を聞いた耳を、水道の水で洗はんと欲する趣があつた。

本來だと、朋友が先生の令嬢を娶りたいに就いて、下聽に來たものを、聞かせない、と云ふも依怙地なり、料簡の狭い話。二才らしく又何も、娘がくれた花だといつて、人に惜むにも當らない。此の筆法を以てすれば、情婦から來た文殼が紛込んだと云ふので、紙屑買を迫懸けて、慌てゝ盜賊と怒鳴り兼ねまい。此方の人措いて下さんせ、と洒落にも嗜めて然るべき者までが、其折から、一寸留女の格で早瀬に花を持たせたのでも、河野一家に對しては、お蔭さへ、如何の感情を持つかゞ明かに解る。

其は英吉と、内の人の結婚に對する意見の衝突の次第を、襖の蔭で聽取つた所爲もあらう。

然うでなくつても、惚れさうな藝妓はないか。新學士に是非と云つて、達引きさうな朋輩はないか、

と煩く尋ねるやうな英吉に、厭なこつた、良人が手を支いてものを言ふ大切なお嬢さんを、とお蔦は唯それだけでさへ引退る。處へ、幾條も幾條も家中の縁の糸は兩親で元緊をして、颯さらりと鶉繩に捌いて、娘たちに浮世の波を潜らせて、爰を先途と鮎を吞ませて、ぐツと手許へ引手繰つては、咽喉をギウの、獲物を占め、一門一家の繁昌を企むやうな、ソ
ンな勘作の許へお嬢さんを嫁られるもんか。
否、私が肯かないわ、とお源をつかまへて談ずる處へ、熱い湯だつた、と幾干か氣色を直して、がたひし、と歸つて来た主税に、一寸お前さん、大々なんですか、とお蔦の方が念を入れたほどの勢。

何が大大だか、主税には唐突で、即座には合點し
かねるばかり、お薦めの方の意氣込が凄じい。

まだ、取留めた話ではなし、唯學校で見初めた、
と厭らしく云ふ。其も、戀には丸木橋を渡つて落ち
てこそ然るべきを、石の橋を叩いて、杖を支いて渡
ろうとする縁談だから、其處等聽合はせて歩行く中
に、誰かの口で水を注せば、直ぐに川留めの洪水ほ
どに目を廻はしてお流れになるだらう。

雖然、何故か、母子連で學校へ觀に行つた、と聞
いたゞけで、お妙さんを觀世物にし、又爲れたやう
で癪に障つた。然し物にはなるまいよ、と主税が落
着くと、否、私は心配です。何處を何聞き廻つたつ
て、あのお嬢さんに難癖を着けるものはありません。
いづれ眞砂町様へ言入れるに違ひますまい。それに
河野と云ふ人が、他に取柄は無いけれど、唯頼もし
いのが押の強いことなんですから、一押し二押しで、惡
くすると出來ますよ。出來るやうな氣がしてならな
い。私は何だか最うお妙さんが、ペろ／＼と嘗めら

れる夢を見て、今夜にも寝て居いて魔されさうで、
お可哀相でなりません。貴郎油断をしちや厭ですよ、
と云つた。お蔭の方が、其の晩毛蟲に附着かれた
夢を見た。何時も河野の其の眉が似て居ると思つた
から。――

尤も河野は、綺麗に細眉にしていたが、剃りづけ
ませぬやう、と父様の命令で、近頃太くして居るの
で、毛蟲ではない、臥蠶である。然るに此の不生産
的の美人は、蠶の世を利するを知らずして、毛蟲の
厭ふべきを恐れて居た、不心得と言はねばならぬ。

で、お蔭は、例ひ貴郎が、其癖、内々お妙さんに
岡惚をして居るのでも可い。河野に添はせるくらゐ
なら、貴郎の令夫人にして私が追出される方が一層
増だ、とまで極端に排斥する。

此の異體同心の無二の味方を得て、主税も何とな
く頼母しかつたが、扨て風は何處を吹いていたか、
半月ばかりは、英吉も例になく顔を見せなかつた。

と一日、（早瀬氏は居らるゝかね。）
應柄のやうな、然うかと云つて間違ひの無いやう

な訪おもづれ方かたをして、お源げんに名刺めいしを取次とりつがせた者ものがある。

主税ちからは、しかつて居ゐた翻譯ほんやくの筆ペンを留とめて、請取うけとつて見みると、一寸心當ちよつとこころあたりが無なかつたが、どんな人ひとだ、と聞きくと、あの、痘痕あばたのおあんなさいます、と一番ばん疾はやく目めについた人相にんさうを言いつたので、直すぐ分わかつた。

本名坂田禮之進ほんみやうさかたれのしん、通とほり名なをアバ大人たいじん、誰たれか早口はやくちな男をとこがタの字じを落おとした。ゆつくり言いへばアバ大人たいじん、孰方どちらでもよく通とほる。通とほりが可よければと言いつて、渾名あだなを名刺めいしに書かくものはない。手札てふだは立派りっぱに、坂田禮之進さかたれのしん・・・・・傍かたはらへ羅馬字ロオマで、L・Sakata・

即すなはち歴々れき／＼の道學だうがく者だうがくしや先生せんせいである。

渠かれの道學だうがくは、宗教しうけう的てきではない、倫理りんり的てき、寧むしろ男女だんぢよ交際かうさい的てきである。とゞもに、其その痘痕あばたと、細君さいくんが若わかうして且かつ美びであるのを以もつて、處々しよろ／＼の講堂かうだうに於おいても、演説會えんげつくわいに於おいても、音おとに聞きえた君子くんしである。

謂いふまでもなく道徳だうとくく圓滿ゑんまん、但たゞし其その細君さいくんは三度さんど目めで、前まへの二人ふたりとも若死わかじをして、目下いまのが又また顔色かほいろが近來きんらい、蒼あをい。

と云いつて敢あへて君子くんしの徳とくを傷きつけるのではない、が、

要のないお饒舌をするわけではない。大人は、自分には二度まで夫人を殺したゞけ、蓋の数の三々九度、三度の松風、さゝんざの二二十七度で、婚姻の事には馴れてござる。

處へ、名にし負ふ道學者と来て、天下此の位信用すべき媒妁人は少いから、呉も越も隔てなく口を利いて巧く纏める。従うて諸家の閨門に入用すること頻繁にして時々厭らしい！と云ふ風説を聞く。其の袖を曳いたり、手を握つたりするのが、所謂男女交際の、此の男の餘徳であらう。尤も出来た験はない。蓋し爲ざるにあらざる能はざるなりでも何でもない。道徳は堅固で通る。於愛乎、品行方正、御媒妁人でも食つて行かれる……

二十四

道學先生の、其の坂田禮之進であるから、少くともめ組が出入りをするやうな家庭？へ顔出しをする筈がない。と一度は怪んだが、偶然河野の叔父に、同一道學者何某の有るのに心付いて、主税は思はず眉を寄せた。

諸家お出入りの媒妁人、或意味に於ける地者稼の冠たる大家、扱ては、と早やお妙の事が胸に應へて、先づ兎も角も二階へ通すと、年配は五十ばかり。押しものゝ痘痕は一目見て氣の毒な程で、然も黒い。字義を以て論ずると月下氷人でない、竈下炭焼であるが、身躰よく、カラアが白く、磨込むだ顔が照々と光る。地の透く髪を一筋梳に整然と櫛を入れて、髯の尖から小鼻へかけて、ぎら／＼と油ぎつた處、如何にも内君が病身らしい。

扱て、お初にお目に懸りまする、如何でござりまするか、益々御翻譯で、と嘸食心に困つて切々稼ぐだらう、と謂はないばかりな言を、けろりとして世辭に云つて、衣兜から御殿持の煙草入、薄色の鐵の

派手な鹽瀬に、鐵扇かづらの浮織のある、近頃行はるゝ洋服持。何處のか媒妁人した御縁女の贈物らしく、貰つた時の移香を、今恚く中古に草臥れても同一香の香水で、追かけ／＼香はせてある持物を取り出して、氣になるほど爪の伸びた、湯が嫌らしい手に短い延の銀煙管、何か目出度い薄つぺらな彫のあるのを控へながら、先づ一ツ奥齒をスツと吸つて、寛悠と構へた處は、生命保険の勧誘も出來さうに見えた。

甚だ突然でござりますが、酒井俊藏氏令嬢の儀で……ごわりました、と又スツと齒りをする。其、えへん！と云へば灰吹と、諸禮躰方第一義に有るけれども、何にも御馳走をしない人に、例ひ噫が葱臭かろうが、干鰯の纖維が挟つてい然うであらうが、お楊枝を、と云ふは無禮に當る。

其處で、止むことを得ず、むづ／＼する口を堪へる下から、直ぐに、スツト又候風を入れて、でござりまするに就いて、恚やうな事は、餘り正面から申入れまするよりと、考へることでござりまする……と搔つまんで謂へば、自分は未だ一面

識も無いから、門生の主税から紹介をして貰ひたいと言ふのである。

南無三、橋は渡つた、何時の間にか、お妙は試験の合格になつた。

今は表向に縁談を申込むばかりに爲たらしい。其に、自分に紹介を求めめるのは、英吉に反対した廉もあり、主税は面當をされるやうに撥く思つたばかりか、少からず敵の機敏に、不意打を食つたのである。

否、お斷り申しませう、英吉君に難癖のある譯ではないが、河野家の理想と言ふものが根も葉も擧げて氣に入らない。餘所で紹介をお求めなさるなり、又酒井先生は紹介の有り無しで、客の分隔をするやうな人ではないから、直接にお話しなすつて、御縁があれば纏る分。心に潔しとしない事に、名刺一枚御荷擔は申兼ねる、と若武者だけに逸つてかゝると、其分は百も合點で、戰場往來の古兵。

取りあえず、スースーと齒をすゝつて、ニヤノ、と笑ひかけて、何か令嬢お身の上に就いて、下聽をするのが、御賛成なかつたとか申すことでごわりま

したな。御説に因れば、好いた女なら娼妓でも（と
少しおまけをして、）構はん、死なば諸共にと云ふ。
いや、人生意気を重んず、（ト齒をすゝつて）で、
ごわりますが、世間もあり親もあり・・・
と是から道學者の面目を發揮して、河野のために
其の理想の、道義上完美にして非難すべき點の無い
のを説くこと數千言。約半日にして一先づ日暮前に
立歸つた。雑と半日居たけれども、飯時を避けるな
ぞは、さすがに馴れたものである。

客が来れば姿を隠すお蔭が内に居るほどで、道學先生と太刀打して、議論に勝てよう道理が無い。主税の意氣づくで言ふことは、唯禮之進の齒ですゝられるのみであつたが、厭なものも厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄氣味の、酒井先生へ紹介は斷然、お斷り。

其處を一つお考へ直されて、と言を残して歸つた後で、アバ大人が媒妁ではなほの事。とお妙の顔が蒼くなつて殺されでもするやうに、酒も飲まないで屈託をする、とお蔭はお蔭で、かくまつてあつた姫君を、鐘を合圖に首討つて渡せ、と懸合はれたほどの驚き加減。可愛い夫が可惜がる大切なお主の娘、成らば身替りにも、と云ふ逆上せ方。凡てが淨瑠璃の三の切を手本だが、憎くはない。

さあ、貴郎、然うしていらつしやる處ではありません、早く眞砂町へおいでなすつて、先生が何なら奥様まで、あんな許へは御相談なさいませんやうに、

お頼みなさならなくツちや不可ません。一寸、羽織を着換へて、と箆笥をがたりと引いて、ア、しばらく御無沙汰なすつた、明日め組が参りますから、何ぞお土産をお持ちなさいまし、先生は薩張したものが好きだ、と云ふし、彼奴が片思ひになるやうに鮑が丁ど可い、と他愛もない。

馬鹿を云へ、縁談の前へ立つて、讒口なんぞ利こうものなら、己の方が勘當だ、そんな先生でないのだから、と一言にして勿ねられた、柳橋の策不被用焉。

又考へて見れば、道學者の説を待たずとも、河野家に不都合はない。英吉とても、唯些とだらしの無いばかり、其に結婚すれば自然治まる、と自分も云へば、然もあらう。人の前で、母様と云はうが、父様と云はうが、道義上敢て差支はない、却て結構なくらゐである。

其の是を難ずる所以は……曰く……
言い難しだから、表向きは何處へも通らぬ。

困つたな、と腕を組めば、困りましたねえ、とお
薦も鬱ぐ。

此處へ大いなる福音を齎らし來つたのはお源で。
手廻りの使ひに遣つたのに、大分後れたにもかゝ
はず、水口の戸を、がたひし勢よく、唯今歸りま
した、あの、御新造様、大大でございます。
明後日出来るのかい、とお蔭がきりもりで、夏の
搔卷に、と思つて古浴衣の染を抜いて形を置かせに
遣つてある、紺屋へ催促の返事か、と思ふと、然う
でない。

此の忠義ものは、二人の憂を憂として、紺屋から
歸りがけに、千裁ものゝ、風呂敷包を持つたまゝ、
内の前を一度通り越して、見附へ出て、土手際の賣
卜者に占て貰つた、と云ふのであつた。
對手は學士の方ですつて、其まで申して占て貰ひ
ましたら、逆も縁は無い斷念めものだ、と謂ひまし
たから、私は嬉しくつて、三銭の見料へ白銅一つ發
奮しました。可い氣味でございますと、獨りで喜ん
でアハ／＼笑ふ。

まあ、嬉しいぢやないか、よく、お前、お嬢さん
の年なんか知つて居たね、と云ふと、勿怪な顔をし

て、否、誰方のお年も存じません。お蔭は腑に落ちない容子をして、賣卜者は、年紀を聞きやしないかい。え、聞きましたから私の年を謂つて遣りました。

當前よ、對手が學士でお前ぢや、と堪り豫て主税が云ふのを聞いて、目を三つて、しばらくして、え、口惜いと、臺所へ逃込んで、賣卜屋の畜生め、どた／＼どた。

二人は顔を見合せて、漸々に笑が出た。

すぐにお蔭が、新しい半襟を一掛禮に遣つて、其の晩は市が榮へたが。

二三日経つて、兎も角、其となく、お妙がお持たせの重箱を返しかた／＼、土産ものを持つて、主税が眞砂町へ出向くと、生憎、先生はお留守、令夫人は御墓参、お妙は學校のひげが遅かつた。

飯かりに其その日ひ、先生せんせいなり奥方おくがたなりに逢あつた處ところで、縁えん
 談だんの事ことに就ついて、兎角とかう謂いふつもりでなく、又また言いは
 れる筋すぢでもなかつたが、久闊ひさしぶり振ぶりではあり、誰方どなたも留る
 守すと云いふのに氣き抜ぬけがする。今度こんど來きた玄關げんくわんの書生しよせいは
 馴染なじみが薄うすいから、卷まきたはこ蓆すゐがらの吸たくさん殻たくさん澤山ひばちな火鉢しきりを頻つきつに突つきつ
 けられても、興きように乗のる話はなしも出でず。しかし此この一兩日いちりやうじつ
 に、坂田さかたと云いふ道學者だうがくしやが先生せんせいを訪問はうもんはしませんか、
 と尋たづねて、來こない、と聞きいたゞけを取柄とりえ。土産みやげもの
 を包つんで行いつた風呂敷ふろしきを畳たみもしないで突つ込んで、
 見みつともないほど袂たもとを膨ふくらませて、茫乎ぼんやりして歸かへりが
 け、其その横町よこぢやうの中程なかほどまで來くると、早瀬はやせさん御機嫌ごきげん宜よろ
 しう、と頓興とんきやうに馴なれ々／＼と聲こゑを懸かけた者ものがある。
 玄關げんくわんに居ゐた頃ころから馴染なじみの車屋くるまやで、見みると障子しやうじを横よこ
 にして眩まばゆい日ひ當あたりを遮さへぎつた帳場ちやうばから、ぬい、と顔かほを
 出だしたのは、酒井さかゐへお出で入いりの其その車夫わかいしゆ。

應おうと立停たちどまつて一言二言ひとことふたこと交かはす次手ついでに、主税ちからは不圖ふと
 心付こころづいて、もしや此頃このころ、先生せんせいの事ことだの、お嬢おぢやうさんの
 事ことを聞ききに來きたものはないか、と聞きくと、月つきはじめ

にモオニングを着た、痘痕のある立派な旦那が。

来たか！へい、お目出たい話なんだから些とばかり様子を聞かせな、とおつしやいましてね。終にや、き様、お伴をするだらう、懸りつけの醫師は何處だ、とお尋ねなさいましたつけ。

臺所から、筒袖を着た女房が、ひよつこり出て来て、おやまあ早瀬さん、と笑ひかけて、否、やどでも此處が御奉公と存じましてね、最う／＼賞めて賞めて賞め抜いてお聞かせ申しましてございますよ。お嬢様も近々御縁が極りますさうで、おめでとう存じます、えへへ、と燥いだ。

餘計な事を、と不興な顔をして、不愛想に分れたが、何も車屋へ搜りを入れずとも、又其にしても、モオニング着用は何事だと、苦々しさ一方ならぬ。

曲角の漬物屋、此處いらへも探偵が入つたらうと思ふと、筋向ひのハイカラ造りの煙草屋がある。此の亭主もベラ／＼お饒舌をする男だが、同じく申上げたらう、と通りが／＼に睨むと、腰かけ込んだ學生を對手に、其の又金齒の目立つ事。

内へ歸ると、お蔭はお蔭で、其の晩出直して、今度は自分が賣卜の前へ立つと、此の縁は屹と結ばる、と易が出たので、大きに鬱ぐ。

尤も賣卜者も如才はない。お源が行つたのに較べれば、容子を見たゞけでも、お蔭の方が結ばるに違ひないから。

一日措いて、主税が自分囁まれるのさる學校の授業を濟まして歸つて來ると、門口にのそりと立つて、頤を撫でながら、じろ／＼門札を視めて居たのが、坂田禮之進。

早や此處から齒をスーと吸つて、先刻からお待ち申して……は些と變だ。

扱ては誰も物申に應うるものが無かつたのであらう。女中は外出でお蔭は隠れた。……

無人で失禮。さあ、何うぞ、と先方は編上靴で手間が取れる。主税は氣早に靴を脱いで、癩癩紛に、突然二階へ懸上る。段の下の扉の蔭から、そりやこそ旦那様。と、によつと出た、お源を見ると、取次に出ないも道理、勝手働きの玉襷、長刀小脇に搔込

むだりな。高筭たかばうきに手拭てぬぐひを被かぶせたのを、柄長えながに構かまへて、逆上のぼせた顔色がんとしよく。

馬鹿ばかめ、と噴出ふきだして飛上とびあがる後うしろから、稍やゝあつて、道だう學先生がくせんせい、のそり／＼。

二階にかいの論判ろんばん一時ひとときに餘りけるほどに、雷様かみなりさまの時ときの用よう心の線香せんかうを芬ぶんとさせ、居間あまから顯あらはれたのはお蔭つたで、艾もぐさはないが、禁厭まじないは心ゆかし、片手かたてに煙草たばこを一撮ひとつまみ。拔足ぬきあしで玄關げんくわんへ出て、禮之進れいのしんの靴くつの中なかへ。此燃草このもえぐさは利きが可よかつた。■と煙けぶりが、むら／＼と立たつ狼煙のろしを合圖あひづに、二階にかいから降りる氣勢けはひ。翻然ひらり路地ろぢへお蔭つたが遁にげ込むと、未だまだ其その煙けむりは消えないので、雑水ぞふみづを撒まきかけて此この一藝いちげいに見惚みとれたお源げんが、さしつたりと、手てでしやくつて、ざぶりと掛かけると、をかしの皮かわの臭におひがして、其處等そこらざうみづ中水ちゆうみづだらけ。

夫れ熟々、史を按ずるに、城なり、陣所、戰場なり、軍は婦の出る方が大概敗ける。此の日、道學先生に對する語學者は勝利でなく、禮之進の靴は名譽の負傷で、揚々》と引擧げた。

所以如何となれば、お厭とあれば最早紹介は求めますまい、其のかはりには、當方から酒井家へ申入れまする、此の縁談に就きまして、貴方から先生に向つて、河野に對する御非難をなされぬやう。御意見は御意見、感情問題は別として、是だけはお願い申したいでござりますが、と婉曲に言ひは言つたが、露骨に遣つたら、邪魔をする勿であるから、御懸念無用と、男らしく判然答へたは可いけれども、要するに釘を刺されたのであつた。

禮之進の方でも、酒井へ出入りの車夫まで捜を入れた程だから、其の分は随分手が廻つて、従つて、先生が主税に對する信用の點も、情愛のほども、子の如く、弟の如きものであることさへ分つたので、先んずれば人を制すで、ぴたりと其の口を壓へたの

であらう。

讒口は決して利かない、と早瀬は自分も言つたが、又此の門生の口一ツで、見事、纏る縁も破ることは出来たのだつたに。

此處で賽は河野の手に在矣。兎も角もソレ勝負、丁か半かは酒井家の意志の存する處に因るのみとぞなんぬる。

先生が不承知を言へばだけでも、諾とあれば其まで。お妙は河野英吉の妻になるのである。河野英吉の妻にお妙がなるのである歟。

お薦さへ、憂慮ふより寧ろ口惜がつて、ヤイノ、騒ぐから、主税の、とつおいつは一通りではない。何は措ても、餘所ながら眞砂町の様子を、と思ふと、元來お薦ある爲に、何となく疵持足、思ひなしで敷居が高い。

で何となく遠のいて、漸々二日前に、久しぶりで御機嫌窺ひに出た處、悪くすると、最う禮之進が出て向いて、縁談が始まつて居さうな中へ、急に足近くは我ながら氣が咎める。

愚圖々々すれば、貴郎例に似合はない、きり／＼なさいなね・・・とお蔦が齒痒がる。

勇を鼓して出掛けた日が、先生は、來客があつて、お話中。玄關の書生が取次ぐ、と（この次、來い。）は、ぎよつとした。さりとして曲がない。内證のお蔦の事、露顯にでも及んだかと、まさかとは思ふが氣が、怯れがして、奥方にも一寸挨拶をしたばかり。其の挨拶を受けらるゝ時の奥方が、端然として針仕事の、氣高い、奥床しい、懐い姿を見るにつけても、お蔦に思較べて、愈々後暗さに、あとねだりを被成らな
いなら、久しぶりですから一銚子、と莞爾して仰せ
ある、優しい顔が、眩いやうに後退して、いづれ又、
と逃出すが如く歸りしなに、お客は誰？・・・
と竊と玄關の書生に當つて見ると、坂田禮之進、噫、
止ぬる哉。

しばらくは早瀬の家内、火の消えたる如しで、憂慮しさの餘り、思切つて、更に眞砂町へ伺つたのが、
即ち藥師の縁日であつたのである。

些と、恐怖の形で、先玄關を覗いて、書生が燈下
に読書するのを見て、又お邪魔に、と頭から遠慮を

して、扱て、先生は、と尋ねると、前刻御外出。奥様は、と云ふと、少々御風邪の氣味。其では、お見舞に、と奥に入ろうとする縁側で、女中が、唯今すや／＼と御寐に成つていらつしやいます、と云ふ。

悄悄玄關へ戻つて、お嬢さんは、と取つて置きの頼みの綱を引いて見ると、是は、以前奉公していた女中で、四ツ谷の方へ縁附いたのが、一年ぶりでも沙汰見舞に來て、一晚御厄介になる筈で、お夜食が濟むと、奥方の仰に因り、お嬢さんのお伴をして、藥師の縁日へ出たのであつた。

其では私も通の方を、孰後刻、と是を機に。出しなに又念の爲に、其後、坂田と云ふのは來ませんかと聞くと、アバ大人ですか、と書生は早や渾名を覺えた。は／＼、來ましたよ。今日の午後。

主税は、禮之進が早くも二度の魁を働いたのに、
少なからず機先を制せられたのと一搗て加へてお
薦の一件が暴露たゝめに、先生が太く感情を損ねら
れて、故にも然う爲れる歟、と思はれないでもな
い一玄關の畳が冷く堅いやうな心持とに、屈託の
腕を拱いて、其處ともなく横町から通りへ出て、件
の漬物屋の前を通ると、向ふ側が唯ある大構の邸の
黒板塀で、此間しばらく、三方から縁日の空が取囲
んで押揺がす如く、きら／＼と星がきらめいて、そ
れから富坂をかけて小石川の樹立の梢へ暗くなる、
一寸人足の途絶え處。

東へ、西へ、と置場處の間敷を示した標杓が仄白
く立つて、車は一臺も無かつた。眞黒な溝の縁に、
野を焚いた跡の濕つたかと思える破風呂敷を開いて、
式の如き小灯が、夏に成つても是ばかりは蟲も寄る
まい、明の果敢さ。三束五束附木を竝べたのを前に

置いて、手を支いて、縫れ髪の頸清らかに、襟脚白く、女房がお辭儀をした、仰向けに成つて、踏反つて、泣寐入りに寐入つたらしい嬰兒が懷に、膝に絶つて六歳ばかりの男の子が、指を銜へながら往來をきよるきよると視める背後に、母親の其の背に凭れかゝつて、四歳ぐらゐなのが最う一人。

一陣風が吹くと、姿も店も吹き消されさうで哀な光景。浮世の影繪が鬼の手の機關で、月なき辻へ映るのである。

然りながら、縁日の神佛は、賽銭の降る中ならず、恚る處にこそ、影向して、露にな濡れそ、夜風に堪へよ、と母子の上に袖笠して、遠音に觀世ものゝ囃子の聲を打聞かせ給ふらんよ。

健在なれ、御身等、今若、牛若、生立てよ、と竊に河野の入門を呪つて、主税は袂から戛然と音する松の葉を投げて、足疾く其の前を通り過ぎた。

不圖例の煙草屋の金齒の亭主が、箱火鉢を前に、胸を反らせて、煙管を逆に吹口でぴたり戸外を指して、ニヤリと笑つたのが目に附くと同時に、四五人

店前を塞いだ書生が、此方を見向いて、八の字が崩れ、九の字が分れたかと同じに立騒いで、よう、と聲を懸ける、萬歳、と云ふ、叱、と壓へた者がある。

向ふの眞砂町の原は、眞中あたり、火定の濟んだ跡のやうに、寂しく中空へ立つ火氣を包んで、黒く輪に成つて人集り。寂寞した其の原のへりを、此の時通りかゝつた女が二人。

主税は一目見て、胸が騒いだ。右の方が、お妙である。

リボンも顔も單に白く、かすりの羽織が夜の艶に、ちら／＼と蝶が行交ふ歩行ぶり、紅ちらめく袖は長いが、不斷着の姿は、年も二ツ三ツ長けて大人びて、愛らしいよりも艶麗であつた。

風呂敷包を左手に載せて、左の方へ附いたのは、大一番の圓鬚だけれども、花簪の下に成つて、脊が低い。渾名を鮫と云つて、ちよんぼりと目の丸い、額に見上げ皺の夥多しい婦で、主税が玄關に居た頃勤めた女中どん。

心懸けの好い、實體もので、身が定まつてからも、

恚うした御機嫌うかゞひに出る志。お主の娘に引添
ふて、身を固めて行く態の、其の圓鬚の大いのも、
恚る折から頼もしい。

煙草屋の店でくる／＼ばち／＼、一打ばかりの眼
球の中を、仕切て、我身でお妙を遮るやうに、主税
は眞中へ立つたから、餘り人目に立つので、此方か
ら進んで出て、聲を掛けるのは憚つて差控へた。
而してお妙が氣が付かないで、すら／＼と行過ぎ
たのが、主税は何となく心寂しかった。つい前の年
までは、自分が、あゝして附いて出たに。

とりボンが靡いて、お妙は立停まつた。
肩が離れて、大な白足袋の色新しく、附木を賣る
女房のあはれな灯に近いのは圓鬚で。實直ものゝ
丁寧に、屈み腰に成つて手を出したは、志を恵んだ
らしい。親子が揃つて額づいた時、お妙の手の巾着
が、羽織の紐の下へ入つて、姿は辻の暗がりへ。
書生たちは、ぞろ／＼煙草屋の軒を出て、齊く星
を仰いだのである。

男金女士 をとこかねをんなつち 大に吉 おほいきち、子五人 こにんか九人 にんあり衣食満ち

富貴 ふつきにしてー

男金女士 をとこかねをんなつちこそ大吉 だいきちよ

衣食 いしよくみち／＼・・・・

と歌 うたの方も衣食 いしよくみち／＼のあとは、蟲蝕 むしくひと、雨染 あましみと、摺剥 すりむけたので分 わからぬが、上 うへに、業平 なりひらと小町 こまちのやうなのが對向 さむかひで、前 まへに土器 かはらけを控 ひかへると、萬歳 まんざい烏 ゑ帽子 ぼうしが五人 にんばかり、づらりと拜伏 はいふくした處 ところが描 えがいてある。如何 いか様 さまにも大吉 だいきちに相違 さうゐない。

主税 ちからは、お妙 たへの背後 うしろ姿 すがたを見送 みおくつて、風 かぜが染 しみるやうな懷 ふところ手で、俯向 うつむき勝 がちに薬師 やくし堂 だうの方 ほうへ歩行 あるいて來 きて、爰 こゝに露店 ろてんの中 なかに、三世 さんぜ相 さうがひつくりかへつて、是 これ見 みよ、と言 いはないばかりなのに目 めが留 とまつて、漫 そぞろに手 てに取 とつて、相性 あひしやうの處 ところを開 あけたのであつた。

其 その英吉 えいきちが、金 きんの性 しやう、お妙 たへが、土性 つちしやうであることは、豫 あらかじめお薦 つたが美 うつくしい指 ゆびの節 ふしから、寅卯 とらういぬ戌亥 くりだと繰 くり出したものである。

半吉 はんきちでゞもある事 ことか、大 おほいに吉 よしは、主税 ちからに取 とつて、

一向に芽出度ない。勿論、いかに迷へば、と云つて、三世相を氣にするやうな男ではないけれども、自分には兎に角、先生は言ふに及ばずながら、奥方は何かすると、一白九紫を口にされる。同じ相性でも、始まるし、中程宜しからず、未覺束なしと云ふ縁なら、幾干か破談の方に頼みはあるが……衣食満ち満ち富貴……は弱つた。

のみならず、子五人か、九人あるべしで、平家の一門、藤原一族、愈よ天下に蔓らむずる根ざしが見えて容易でない。

既に過日も、現に今日の午後にも、禮之進が推参に及むだ、と云ふきつきさきなり、何となく、此の縁纏まり然うで、一方ならず氣に懸る。

あゝ、先生には言はれぬ事、奥方には遠慮をすべき事にしても、今しも原の前で、お妙さんを見懸けた時、聲を懸けて呼び留めて、もし河野の話が出たら、私は厭、とおつしやいよ、と一言いえば可かつたものを。

大道で話をするのが可訝ければ、其邊の西洋料理へ、と云つても構はず、鳥居の中には藪蕎麦もある。

さしむかいに云ふではなし、鬪鬚も附添つた、其の女中とても、長年の、犬鷹朋輩の間柄、何の遠慮も仔細も無かつた。

お妙さんが又、あの目で笑つて、お小遣いはあるの？とは冷評しても、何處かへ連れられるのを厭味らしく考へるやうな間ではないに、ぬかつたことをしたよ。

なぞと取留めもなく思ひ亂れて、凝と其の大吉を瞻めて居ると、次第次第に挿畫の殿上人に髯が生えて、忽ち尻尾のやうに足を投げ出したと思ふと、横倒れに、小町の膝へ凭れかゝつて、でれ／＼と溶けた顔が、河野英吉に、寸分違はぬ。

「旦那如何でございます。えへ、と、かんなの灯の蔭から、氣味の悪い唐突の笑聲は、當露店の亭主で、目を細うして、額で睨んで、

「大分御意に召しましたやうで、えへ、」

「幾干だい。」

ときよつとした主税は、空で値を聞いて見た。

「然うでげすな。」

と古帽子の庇から透かして、搗めつゝ、

「二十銭にいたして置きます。」と天窓から十倍に吹懸ける。

其の時から透かしてらる。

主税は思はず三世相を落して、

「高價い！」

「お品が少うげして、へゝゝ、當節の九星早合點、

陶宮手引草などゝ云ふ活版本とは違ひますで、」

「何だか知らんが、散々汚れて引斷ぎれて居るぢやないか。」

「でげすがな、繪が整然として居りますでな、挿

繪は秀蘭齋貞秀で、是や三世相かきの名人でげす。」

と出放題な事を云ふ。相性さへ悪かつたら、主税

は二十銭の其の二倍でも敢て惜くはなかつたらう。

「餘り高價いよ。」

と立ちかける。

「お幾干で？えゝ、旦那。」

と引据えるやうに壓へて云つた。

「半分か。」

「へい。」

「
其^{それ}だつて廉^{やす}くはない。
」

亭主は膝を抱いて反身になり、禅の問答持つて来い、と云ふ高慢な顔色で。

「半價値は酷うげす。植木屋だと、ぢやあ鉢は要りませんか、と云つて手を打つんでげすかな。晝だけ引剥して差上げる譯にも参りませんで。何うぞ一番御奮發を願ひてえんで。五錢や十錢、旦那方にや何だけの御散財でもありやしません。へへへへへ、」

「一體高過ぎる、無法だよ。」

と主税は其の言ひ種が憎いから、益々買ふ氣は出なくなる。

「でげすがな、これから切通しの坂を一ツお下りになりや、五兩と十兩は飛ぶんでげせう。其處で以て、へへへ、相性は聞きたし年紀は秘したしなんて寸法だ。えへ、旦那、三世相は御祝儀にお求め下さいな。」

愈々むつとして、

「要らない。」と、又立とうとする。

「ぢや最う五錢、五百、たつた五錢。」

片手を開いて、肱で肩癖の手つきになり、ばら／

と主税の目前へ揉み立てる。

憤然として衝と立つた。主税の肩越しにきらりと飛んで、かんでらの燻つた明を切つて玉の如く、古本の上に異彩を放つた銀貨があつた。

同時に、

「要るものなら買つて置け。」

と二のある、凜とした聲がかゝつた。

主税は思はず身を窘めた。帽子を拂つて、は、と手を下げて、

「先生。」

露店の亭主は這出して、慌てゝ古道具の中へ手を支いて、片手で銀貨を壓へながら、きよとんと見上げる。

茶の中折帽を無造作に、黒地に茶の千筋、平お召の一枚小袖。黒斜子に丁子巴の三つ紋の羽織、紺の無地献上博多の帯腰すつきりと、片手を懐に、衿短な袖を投げた風采は、丈高く痩せぎすな肌に粹である。然も上品に衣紋正しく、黒八丈の襟を合はせて、色の淺黒い、鼻筋の通つた、目に恐ろしく威のある、

品の^{ひん}ある。眉^{まゆ}の秀^{ひい}でた、但^{たゞ}其^その口^{くちもと}許^{もと}はお妙^{たへ}に肖^にて、
嬰兒^{みどりこ}も懐^{なつ}くべく無^{むりやう}量の愛^{あい}の含^{ふく}まるゝ。

一寸^{ちよつと}見^みには、彼^かの令^{れい}嬢^{ぢやう}にして、其^その父^{ちち}ぞとは思^{おも}は
れぬ。令^{おく}夫人^{がた}は許^{いひなづけ}嫁^めで、お妙^{たへ}は先^{せん}生^{せい}がい未^{いま}だ金^{きん}鈕^{ぼたん}で
あつた頃^{ころ}の若^{わか}木^{かぎ}の花^{はな}。夫^ふ婦^{たり}の色^{いろ}香^かを分^わけたのである、
とも云^いふが・・・

酒^{さか}井^みは何^ど處^こか小^{せつ}酌^{しやく}の歸^か途^{へり}と覺^{おぼ}しく、玉^ぎ樹^{よくじゆ}一^{ひとり}人^{えん}縁^{にち}日^{にち}
の四^あ邊^{たり}を拂^はつてイ^たん^ずだ。又^{また}何^い時^つか、人^{ひと}足^{あし}も稍^や此^この邊^{あたり}
に疎^{まぼら}に成^なつて、藥^{やく}師^しの御^お堂^{だう}の境^{けい}内^{だい}のみ、其^{その}中^{なか}空^{そら}も汗^{あせ}
するばかり、油^ゆ煙^{えん}が低^{ひく}く、露^{ほし}店^{みせ}の大^{おほ}傘^{がらかさ}を壓^{あつ}して居^ある。

會^あ釋^{しやく}をして纒^{わづか}に擡^{もた}げた、主^ち税^{から}の顔^{かほ}を、其^その威^あのあ
る目^めで屹^{きつ}と見^みて、

「少^わいもの^が何^{なん}だ、端^は銭^{した}を彼^{かれ}是^{これ}人^{ひと}中^{なか}で云^いつて居^ある
奴^{やつ}があるかい、見^みつともない。」

と^い言^いひ棄^すてゝ、直^すぐに歩^ほを移^{うつ}して、少^{すこ}し肩^{かた}の昂^{あが}つ
たのも、霜^{しも}に堪^たへ、雪^{ゆき}を忍^{しの}んだ、梅^{うめ}の樹^き振^{ぶり}は潔^{いさぎよ}い。

呆^あ氣^{っけ}に取^とられた顔^{かほ}をして、亭^{てい}主^{しゆ}が、づゝと乗^の出^{りだ}し
ながら、

「へい。」

とばかり怯へるやうに差出した三世相を、ものをも言はず引摺んで、追従つて跡に附くと、早や五六間前途へ離れた。

「何うも恐入ります。えゝ、何、別に入用なのぢ

やないのでございますから、はい、」

と最初の一喝に怯氣々々もので、申譯らしく獨言のやうに言ふ。

酒井は、すらりと懐手のまゝ、斜めに見返つて、

「用らないものを、何だつて價を聞くんた。素見

すのかい、お前は、」

「……」

「素見すのかよ。」

「えゝ、別に、」と俯向いて怨めし然うに、三世相を揉み、且つ捻くる。

少時して、酒井は不圖歩を停めて、

「早瀬。」

「はい、」

と此の返事は嬉し然うに聞えたのである。

名を呼ばれるさへ嬉しいほど、久闊懸違っていたので、いそ／＼懐かしさうに擦寄つたが、續いて云つた酒井の言は、太く主税の胸を刺した。

「何處へ行くんだ。」

是で突放されたやうに成つて、思はず後退りする
こと三尺半。

此の前の、原一つ越した横町が、先生の住居である。其方に向つて行くのに、従つて歩くものを、（何處へ行く。）は情ない。散々の不首尾に、云ふ事も、しどろに成つて、

「散歩でございます。」

「故々、此處の縁日へ出て来たのか。」

「否、實は……。」

と聊か取附くことが出来た……

「先刻、御宅へ伺ひましたのですが、御留守でございますいましたから、後程に又参りませうと存じまして、其間此の邊にぶらついて居りました。先生は、」

酒井がづつと歩行き出したので、たぢ／＼と後を慕ふて、

「何方へ？」

「俺か。」

「ぶつと御歸宅でございますか。」

「知れ切つたやうな事を、つなぎだけに尋ねると、

此の答へが又案外なものであつた。

「俺は、何だ、是からお前の處へ出掛けるんだ。」

「えゝ！」と云つたが、何は措いても夜が明けた

やうに勇み立つて、

「ぢや、あの此方から・・・角の電車へ、」

と自分は一足引返したが、慌てゝ又先へ出て、

「お車を申しませうか。」

とそは／＼する。

「水道橋まで歩行くが可い。あゝ、酔醒めだ。」

と、衣紋を揺つて、ぐつと袖口へ突込んだ、引緊め

た腕組になつたと思ふと、林檎の綺麗な、芭蕉實の

芬と薫る、燈の眞蒼な、明い水菓子屋の角を曲つて、

猶豫はず衝と横町の暗がりへ入つた。

下宿屋の瓦斯は遠し、顔が見えないから幾干か物

が云ひよくなつて、

「奥さんが、お風邪氣でいらつしやいます然うで、

不可^{いけ}ませんでございます。」

「逢^あつたか。」

「否^{いへ}、すや／＼お寐^{やす}みだと承^{うけたまわ}りましたから、御^ご遠^{えん}慮^{りよ}申^{まを}しました。」

「妙^{たへ}は居^あたかい。」

「四^{よつ}四^{よつ}谷^やへ縁^{かたづ}附^ついて居^をります、先^{せん}のお光^{みつ}をお連^つれなさいまして、縁^{えんにち}日^ちへ。」

「然^さうか、娘^{こども}が^で出^あ歩^る行くやうぢや、大^{たい}した御^ご容^{やう}態^{たい}でも無^なしきさ。」

と少^{すこ}し言^{ことば}が和^{やは}らいで來^きたので、主^{ちから}税^しは吻^{ほつ}と呼^い吸^きを吐^ついて、はじめて持^{もち}扱^{あつか}つた三^{さん}世^せ相^{さう}を懷^ふ中^{ちゆう}へ始^{しまつ}末^{まつ}をすると、壱^{いき}岐^ぎ殿^{でん}坂^{ざか}の下^{おり}口^{ぐち}で、急^{きふ}な不^ふ意^い打^{うち}。

「お前^{まへ}の許^{とこ}でも皆^{みんな}健^{たつ}康^{しや}か。」

又^{また}冷^{ひや}りとした。内^{うち}には女^{ぢよ}中^{ちゆう}と……自^じ分^{ぶん}ばかり、(皆^{みんな}健^{たつ}康^{しや}か。)は尋^た常^{じょう}事^{ごと}でない。雖^{けれど}然^{ども}、よもや、と思^{おも}ふから、其^その(皆^{みんな})を僻^{ひが}耳^{みみ}であらう、と自^じ分^{ぶん}でも疑^{うたが}つて、

「はい？」

と、聞^き直^{なほ}したつもりを、酒^さ井^{かみ}が其^そのまゝ聞^き流^{なが}してしまつたので(然^さやうでございませう。)と云^いふ意^い味^みになる。

で、安からぬ心地がする。突當りの砲兵工廠の夜の光景は、樂天的に視ると、向島の花盛を幻燈で中空へ顯はしたやうで、轟々と轟く響が、吾妻橋を渡る車かと聞爲さるゝが、悲觀すると、煙が黄に、炎が黒い。

通りかゝる時、蒸氣が眞白な瀧のやうに横ざまに漲つて路を塞いだ。

やがて、水道橋の袂に着く――酒井は其の雲に駕して、悠々として、早瀬は霧に包まれて、ふら／＼して。

無言の間、吹かして居た、香の高い巻蓑を、煙の絡むだまゝ、ハタと其處で酒井が棄てると、蒸氣は、こゝで露に成つて、ジューと火が消える。

萌黄の光が、ぱら／＼と暗に散ると、炬の如く輝く星が、人を乗せて衝と外濠を流れて來た。